C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2009

Vol.4

小学版

特集

1 移行措置対応のポイント 第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

2 課題整理

どこが難しい？ 国語の指導
——読者アンケート結果を踏まえた課題整理

4 理論編

言語活動を通し、実生活に生きる思考力・判断力・表現力を育てる
千葉大教育学部 **寺井正憲**教授

8 実践編 1

子どもの意欲を刺激する学習材の工夫と提示で力を育む
千葉県習志野市立大久保小学校

14 実践編 2

「言語活動の設定プロセス」で「ぶれない言語活動」を実施
岩手県奥州市立衣川（ころもがわ）小学校

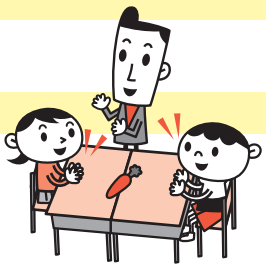
連載

20 ベネッセのデータでみる子どもと教育

学習習慣・学習意欲

24 Hop! Step! 小学校英語！

クイズやゲームを工夫し子どもの主体的なコミュニケーション能力を育む
三重県鈴鹿市立椿小学校



28 つながる学校と家庭の学び

子どもの生活習慣を改善する「にこにこ家族会議」
鳥取県米子市立五千石（ごせんごく）小学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

特集

移行措置対応のポイント 第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

学校現場では、子どもの言語の力に不足を感じ、更なる指導が必要だと考える教師が多いようだ。新学習指導要領でも、「言語活動の充実」はポイントの一つであり、国語はその中心を担うことが求められている。今号では、国語で今後求められる授業づくりについて、理論と実践の両面から考える。

Q 児童の国語の力について、課題に感じていることは何ですか

- 実生活と結び付けて考える姿勢に乏しい
- 他の児童の意見を聞いて自分の考えを述べることが苦手
- 文章を書く意欲や能力が低下している
- 読解力。教科書の文章が理解できないために学習が進まない

＊『VIEW21』読者モニターアンケートの自由記述回答より抜粋。調査対象は、全国の『VIEW21』小学版読者モニター（小学校教師）。実施時期は、2009年9～11月で2回実施。郵送にてアンケート用紙を配布。ファクスで回収。有効回答数は1回目が112、2回目が99

どこが難しい？ 国語の指導

――読者アンケート結果を踏まえた課題整理

国語科の学習指導要領では、学習過程の明確化や言語活動例が具体的に例示されるなどの改訂が行われた。小誌の読者モニターへのアンケートやヒアリングからは、これらも含めた改訂への理解がまだ深まっていないことや、実践上の課題があることが明らかになった。

国語科の改訂ポイント

学習過程が明確化された

自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視し、指導事項については学習過程を明確化した。例えば、「書くこと」では、書くことの課題を決める指導事項や、書いたものを交流する指導事項などを新設し、学習過程全体が分かるように内容を構成している。

言語活動例が「内容」に位置付けられ、具体的に例示された

各領域の内容を（1）の指導事項に示すとともに、これまでは内容の取扱いに示していた言語活動例を内容の（2）に位置付け、再構成している。これは、各学年の内容の指導に当たって、（1）に示す指導事項を（2）に示す言語活動例を通して指導することを一層重視したためである。

基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の（2）に日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を具体的に例示している。

＊文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』（平成20年8月）第1章 総説 3 国語科改訂の要点より引用。赤字部分は編集部加筆

実践編 2 岩手県 **奥州市立衣川（ころもがわ）小学校**

身に付けさせたい力を明確にし、系統化と重点化を図るため、「指導事項マトリクス」を作成。「言語活動を設定するプロセス」の明文化により授業のねらいを達成できる言語活動を設定し、定着を図っている

▶▶▶ P.14

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

課題

1. 改訂の方向性への意識が根付いていない

- まだ授業に変化が見られない。**もう少し理解が必要**なのでは？
- 学習にかけた**時間に見合う児童の成長**が見られるのか疑問
- 「**言語活動が前提**」になってしまいがち

2. 学習過程に沿った単元構成が難しい

- **すべての授業で**『学習指導要領解説』の学習過程に則するのは難しい
- より**個々の課題**、**実態に沿った指導**が求められると感じる
- すべての過程が大切だが、**重点化をする必要**がある

3. 言語活動の具現化が難しい

- 限られた授業時数では**実生活に生かせる**言語活動を十分に行えない
- **すべての子どもが同じ活動**を出来るか不安
- 言語活動を**どう具体化すれば良いか**分からない

解決のヒント

理論編 千葉大 **寺井正憲** 教授

言語活動を取り入れる意義と、現在の授業での課題を踏まえた授業づくりのヒントを提案

▶▶▶ P.4

実践編 1 千葉県 **習志野市立大久保小学校**

子どもが意欲を持って取り組めるよう、教師が作った活動の見本を示し、そのために何をすべきかという課題解決型の単元を設計。見本作りは、活動で付けたい力を考えるための教材研究にもなる

▶▶▶ P.8

言語活動を通し、実生活に生きる思考力・判断力・表現力を育てる

千葉大教育学部 寺井正憲 教授

「言語活動の充実」が求められている背景には、今の子どもが抱える学力についての課題がある。国語科の学習指導要領の改訂点や、授業づくりで重視したいポイントについて、『小学校学習指導要領解説 国語編』作成協力者である千葉大教育学部の寺井正憲教授にうかがった。

てらい・まさのり◎徳島大教育学部卒、筑波大大学院博士課程単位取得退学。文教大講師、筑波大附属小学校教諭を経て、現職。専門は国語教育学。『小学校学習指導要領解説 国語編』作成協力者。近著に『小学校国語 活用力を育てる授業～いま身につけさせたい「言葉の力」と指導の実際～』（共編 図書文化社）、『聞き手参加型の音読学習』（編著、東洋館出版社）など。

求められている国語の指導と授業づくりのヒント

「言語活動の充実」の背景と意義

◎PISA調査などから思考力など学力面の課題が浮上

思考力・判断力・表現力の育成が課題となり、国語を中心とした各教科で「言語活動の充実」が求められている。

「言語活動の充実」によって

- 実生活で生きる言葉の力を付けられる
- 思考力・判断力・表現力が育まれ、「生きる力」が高まる
- 誰もが活用の文脈の中で基礎・基本を習得できる

学習指導要領「国語」の改訂ポイント

◎指導事項を課題解決のプロセスに沿って整理

自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視し、PISA型の課題解決プロセスが盛り込まれた。指導においては、この学習過程を意識することが大切。

◎言語活動例が具体化され、「内容」に盛り込まれた

実生活とのつながりを重視し、報告・記録などの言語の機能や表現の様式を明示して、充実させた。言語活動を通して、指導事項を指導することが一層重視されている。

授業づくりのヒント

◎教師自身が言語活動を体験してみる

子どもに付けたい力が明確になる。教師が作ったり、行ったりしたものを提示することで、子どもの意欲も高まり、活動も進めやすくなる。

◎「学力調査」を活用する

文部科学省「全国学力・学習状況調査」の問題は、今後、求められる力を踏まえて作られている。言語活動を通して身に付けるべき力を考える参考にすると良い。

＊上記は、寺井教授への取材を基に編集部がまとめた

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

「言語活動の充実」の背景と意義

1 思考力・判断力・表現力の育成が課題

新学習指導要領において言語活動の充実が求められている背景には、PISA調査で明らかになった「読解力」の低さなどの学力課題があることを、まずはご理解ください。文部科学省「読解力向上プログラム」（2005年12月）によると、PISA調査では、「解釈（＊1）」や「熟考・評価（＊2）」の問題に弱く、とりわけ「自由記述（＊3）」で無答率が高いことが明らかにされています。

こうした課題に対処するために、習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用することを通じて、思考力・判断力・表現力を高めていくことが求められています。そのために必要なことは、習得と活用の学習が一体となり、子どもの学習意欲を引き出すことの出来る「言語活動」にほかなりません。レポートの作成、記述などの、知識・技能を活用する言語活動は、国語を中心として各教科で進められていくことが、新学習指導要領で強調されています。言語の能力を育成することは、思考力・判断力・表現力等の基盤にもなります。

2 「生きる力」を高める必要性

重要なことは、「生きる力」に結び付く力が求められている、ということです。例えば、思考力の育成が必要といっても、テクニックとしての思考ではありません。無答率が高い背景には、単に論理的に考える力が弱いというだけでなく、考える意欲や意志の低下があるように思います。考えることは負担を伴う作業ですが、粘り強く考えることで思考力は高まっていきます。ところが、今の子どもには、粘り強く考えようとする意欲や意志、言い換えれば「生きる力」が低下しているようです。ですから、少し考えて分からなければ、あきらめて白紙で提出してしまうのです。

今後、必要なのは、「生きる力」を形成するような思考力・判断力・表現力の育成ですが、当然、そこには学習意欲が伴っていなければなりません。実生活とつながりのある言語活動を通して、子どもが意欲的に思考や判断、表現をして、課題を解決する過程が重要になるのです。

学習指導要領「国語」の改訂ポイント

1 指導事項に課題解決の過程が明示化された

『小学校学習指導要領解説 国語編』の「付録4」に、「各学年の目標及び内容の系統表」が掲載されています。この中で指導事項が課題解決の過程に沿って整理されたことは、国語の改訂の大きなポイントと言えます。

3領域のうち、「書くこと」を見てみましょう。「目標」の下、(1)の左に「課題設定や取材」「構成」……「交流」と指導事項の五つの見出しが並び、指導事項が「アイウエオカ」で示されています（P.6図1A）。この流れは、PISA型の課題解決のプロセスを内包しているものです。言語活動はこれらの指導事項を身に付けるための活動だと考えてください。

「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域でも、同様に課題解決の過程が示されています。そして、例えば、「読むこと」の見出しに「解釈」というキーワードが何度か出てきますが、これは日本の子どもが苦手とするPISA調査の「解釈」の問題に対応させて、今回、新たに加えられたものです。

2 「言語活動例」は実生活を意識して具体化

従来は学習指導要領の「内容の取扱い」にあった言語活動例が、指導事項に関連付けて各領域の「内容」に示されたことにも注目してください。言語活動例に示された言語の機能や表現の様式は、「学級新聞」「依頼状」「案内状」など、実生活や各教科で使用頻度の高いものが挙げられています（P.6図1B）。

例えば、子どもがアサガオやミニトマトなどの観察記録を書いたものは、多くの場合「生

＊1 書かれた情報がどのような意味を持つかの理解・推論が必要な問題
＊2 テキストに書かれていることと知識・考え方・経験等との結び付けが必要な問題
＊3 答えを導いた考え方や求め方、理由説明など、長めの語句で答える問題

活文」の文体になっています。「今日、○○を観察しました」「早く大きくなって欲しいです」などの表現は必要ありません。記録文と生活文を使い分けられない子どもが多いのは、言語の機能や表現の様式がきちんと指導されていないからです。

しかし、今後の社会で他者に自分の考えを表現し伝えるためには、効果的で適切な言語の機能や表現の様式を考えて用いることが大切です。新学習指導要領では、国語を通して多様な言語の機能や表現の様式を身に付け、実生活や他教科に生かしていくことを大きなねらいとしています。それが、08年の中央教育審議会の答申（＊4）などで述べられた言語活動の充実において「中心となるのは国語」とされた意味です。

新学習指導要領に示された言語活動例のほとんどが、11年度から使われる新しい教科書に入るでしょう。これらはあくまでも例で、他の言語活動を扱っても良いのですが、実生活などへの広がりを意識した表現や言語を用いることが大切です。移行期間のうちから、少しずつこのような活動を授業の中で取り入れていくと良いでしょう。

図1　各学年の目標及び内容の系統表（3・4年生の抜粋）

〔B　書くこと〕　※赤字・下線等は編集部による

	（小）第3学年及び第4学年	
	目　標	(2) 相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら書こうとする態度を育てる。
	(1) 書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。	
A	課題設定や取材	ア 関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること。
A	構　成	イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。
A	記　述	ウ 書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。 エ 文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。
A	推　敲	オ 文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすること。
A	交　流	カ 書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。
	(2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。	
B	言語活動例	ア 身近なこと、想像したことなどを基に、**詩**をつくったり、**物語**を書いたりすること。 イ 疑問に思ったことを調べて、**報告する文章**を書いたり、**学級新聞**などに表したりすること。 ウ 収集した資料を効果的に使い、**説明する文章**などを書くこと。 エ 目的に合わせて**依頼状**、**案内状**、**礼状**などの**手紙**を書くこと。

A の指導事項は、PISA型の課題解決プロセスを踏まえた流れになっている
B の個所では、具体的な言語活動を例示。下線部分が言語の機能や表現の様式。ここを意識して活動をつくることが大切だ。A B は小学校低学年から高等学校までの系統を踏まえて作られており、指導事項や言語活動のレベルが向上していくことが確認できる

国語指導の現状と課題、改善の方向性

1 「おまけ」扱いになっていた言語活動

これまでは、単元の多くの時間は基礎的・基本的な知識・技能の習得に充てられ、最後に応用として少し言語活動を行うというのがよくあるパターンでした。子どもの意欲の向上がねらいであることも多く、単なる「お楽しみ」ということもあったと思います。端的に言えば、言語活動は軽視されていたのです。

しかし、言語活動は思考力などを育むための「活用」に当たり、基礎・基本の学習を盛り込んで構成することが大切です。「習得してから活用に移る」のではなく、「習得と活用を一緒に展開する」と考えてください。

2 基礎・基本が十分に習得されていない

従来型の授業では基礎的・基本的な知識・技能を重視していたとはいえ、それが十分に習得されていたかといえば、私はそうは思いません。教師の発問が中心の授業では、理解の早い一部の子どもが中心となって答え、授業が進められていくことが多いからです。他の子どもは授業についていけないために学習意欲が低下し、更に分からなくなるという構図があったのではないでしょうか。基礎・基

＊4『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』5．学習指導要領改訂の基本的な考え方　（4）思考力・判断力・表現力等の育成 より

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

本の定着には、十分に音読させたり書かせたりする必要がありますが、挙手をして積極的に学ぶのは理解の早い子どもだけという授業では、学力差はますます開いてしまいます。

それに対して、すべての子どもが基礎・基本を身に付けていくのに有効なのが言語活動です。まず、目標が明確なので、子どもたちが主体的に学ぶ姿勢が生まれます。更に、基礎・基本が言語活動に組み込まれていることで、すべての子どもに豊かな学びを保障でき、教師にとっては、発問応答式の授業よりも教えやすくなる効果があるでしょう。

例えば、「物語を書き換えて紙芝居を作る」という言語活動を行う場合、子どもは自主的に音読や視写をします（図2）。単に反応の早い子どもを中心に進められる発問応答で指導するより、習得の効果が高くなるのは当然の結果ではないでしょうか。新学習指導要領にある、「(1)に示す指導事項を(2)に示す言語活動例を通して指導する」とは、このような指導を指しているのです。

授業づくりのヒント

1 教師自身が体験してみる

例えば、子どもが作る作品を、自分自身で作ってみてください。どのような能力が身に付くのかが明確になりますし、子どもがつまずきそうな場面が分かり、前もって手立てを検討できます。子どもに付けたい力を教師が自覚することが重要であるにもかかわらず、無自覚なまま指導していることも多いようです。計画した活動でねらい通りの力が付くのかを確認しましょう。

教師が作った作品を子どもに示せば、学習目標が明確になります。学習意欲が高まり、課題解決の過程を設定しやすくなるでしょう。更に、学習の見本にもなります。一人で学習を進められる子どもにとっては参考の素材になりますし、特に支援が必要な子どもたちは、見本をまねすることから始められます。教師の見本をまねして文字を書くことだけでも、学習です。理想を言えば、二つ以上の見本を用意すれば、表現の多様性を示すことにもなり、子どもの活動に広がりが出ます。各学級担任が一人一つずつ作り、学年で持ち寄って検討するのも良いでしょう。

図2　言語活動で身に付く基礎・基本の例

「物語を書き換えて紙芝居を作る」（2年生）

■物語の構成を理解する力
定められた枚数に従って絵を描く場面を考えることで、物語の構成を理解する力が付く

■文章を読み取る力
絵を描くために文章から情景などを読み取る力が付く

■書く力
文章を書き写す作業を通して、書く力が鍛えられる

■音読する力
発表に備えて何度も練習するうちに音読する力が付く。暗唱できるようになる子も多い

上記のような力を身に付けるために、「紙芝居を作る」という活動をすることで、子どもは意欲的に学ぶ。同時に、すべての子どもが自身の活動を通して基礎・基本を習得できる

2 学力調査を活用する

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」の問題（＊5）には、今後、子どもに求められる力を示すヒントがちりばめられています。しかし、調査をしただけで終わったり、調査結果から子どもの実態を把握することだけにとどまったりして、指導改善に生かしきれていない学校が多いようです。

例えば、07年度の「国語A」に、「べっこうあめ作り」の感想文を個条書きの説明文に直し、空欄に記述する問題が出されました。解答するには、「こげなくてよかったです」といった主観的な記述が含まれる文章から、事実のみを抜き出す力が必要です。この問題は、言語の機能や表現の様式を理解させて、目的に応じて使い分けられるようにするという新学習指導要領のねらいと合致しています。また、09年度の「国語A」には、理科の実験報告文に小見出しを入れる問題がありますが、これは各教科が連携して言語活動の充実を図るというねらいを具体化していると考えて良いでしょう。

こうした学力調査の「メッセージ」をしっかり受け止め、今後、子どもに求められる力を理解することに役立ててください。

＊5「全国学力・学習状況調査」の調査問題等は、文部科学省のウェブサイトでご覧いただけます。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/

子どもの意欲を刺激する学習材の工夫と提示で力を育む

千葉県 習志野市立大久保小学校

子どもが課題解決の流れに沿って意欲的に学習を進められるように、学習材やその提示方法に工夫を凝らす習志野市立大久保小学校。課題解決のための言語活動では学び合いも重視し、子どもの言葉の力の向上を図っている。

課　題

実生活のコミュニケーションに課題

2004年度から3年間、「伝え合う力を高める国語学習」を主題とする研究に取り組んだ。グループやクラス全体で「伝え合いの場」を設けることで、協同的な学び合いの基礎が身に付き、子どもの人間関係にも良い影響があった。更に、多読を習慣付けることで、読解力が育ち、語彙（ごい）が豊かになる成果も見られた。

ところが、授業での伝え合う力は付いたものの、日常生活にはあまり生かされていなかった。髙橋セイ子校長は、「実生活に生きる力を付けるため、協同的な学びを大切にしながら、伝え合う『内容』や言葉についての学びをより重視した言語活動が必要だと感じました」と説明する。

研究テーマ

「言語文化の継承と創造」で言葉の力を育成

上記の課題を踏まえ、07年度、研究主題を「共に学び合い、言語文化を創造する国語学習」と設定。子ども同士の学び合いを重視すると共に、「言語文化を創造すること」を「言語文化の継承・創造」ととらえ、言語活動を実践した。

大久保小学校では、言語文化を「言語に関するあらゆること」と位置付ける。研究主任の藤本真由美先生は、次のように説明する。

「言語文化の『継承』とは、文字や古典の読解、漢字や文法の学習のこと。『創造』は既習の知識を基にして言葉の力を高めていくこと。具体的には、情報の編集や活用をしたり手紙や会話を通して考えを表現したりする中で、自分なりの思いや考えを入れて言語文化を創造させます。この『継承』と『創造』の双方を言語活動に取り入れています」

School Data

◎1873（明治6）年開校。首都圏のベッドタウンとして発展する地域にあり、1,000人以上の子どもが在籍する大規模校。1969（昭和44）年に習志野市の国語科研究指定を受けてからは一貫して国語研究に取り組み、毎年、公開研究会を開催している。

校長	髙橋セイ子先生
児童数	1,053人　　学級数 31学級（うち特別支援学級1）
所在地	〒275-0017　千葉県習志野市藤崎6-9-28
TEL	047-474-1346
URL	http://www.nkc.city.narashino.chiba.jp/ookubo/
公開研究会	2010年10月13日（水）

移行措置対応のポイント
第4回

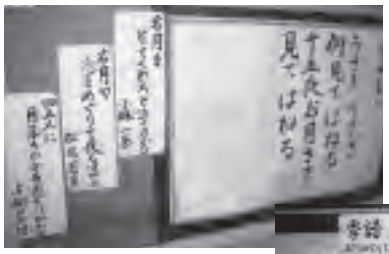
言語活動を通じてつくる国語の授業

「言葉の力」を高めるための実践

1 学校全体で環境を整備

教室や廊下の国語関連の掲示物を充実させ、学校全体で「国語のかおり」が漂う環境づくりに取り組む。国語への興味の入り口となることを期待し、学習の成果物の他、詩や俳句、ことわざ、季語、作家の紹介など、各学年の学習に関連した掲示物を教師が作る。

日常的に国語に親しみ、基礎的な言葉の力を付けていく試みとして、全学年が週２回、朝の帯時間「ステップタイム」で古典や名文、詩歌の音読・視写、スピーチなどを行う。「日本語のリズムや響き、美しさなどを体感的に理解させて、言葉の力の土台を育てるのがねらいです」（藤本先生）



子どもに知っておいて欲しい著名な詩や俳句を書き、廊下に張り出す

子どもが俳句を詠む時に参考になるよう、季語となる言葉を示した

2 学習材とその提示の工夫

子どもの意欲を引き出すことに重点を置いて、言語活動での学習材の設定や提示を行う。例えば、単元の最初に学習目標となる発表会の見本を示し、子どもが学習計画を考え、見通しを持って学べるようにしている。見本作りは、教師の教材研究にも有効だ。「見本を作ることで、子どもが興味を持ちそうな点、つまずきそうな点などが分かります。それらを踏まえ、子どもの実態に合った言語活動をつくっています」（藤本先生）

3 協同的な学び合いの場の設定

共に学び合う「学び方」を身に付けることをねらいとし、ペアでの対話学習、グループ学習、クラス全体での意見交換の場を設ける。重視するのは、相手の考えに耳を傾けて共感する態度を育むこと。特にペア学習は、グループ学習よりもどの子どもも必ず話す機会が持てるので、全校で学び合いの基礎として取り入れている。

2 学習材とその提示の工夫、3 協同的な学び合いの場の設定の具体的な取り組みは、P.10～13で紹介する「単元の流れ」でご覧ください

習志野市立大久保小学校
藤本真由美 Fujimoto Mayumi
研究主任。２学年担任

習志野市立大久保小学校校長
髙橋セイ子 Takahashi Seiko

成　果

子どものコミュニケーションの質が変化

３年間の研究を通して、当初、課題だと感じていた実生活でのコミュニケーションに、変化が見られた。「相手の話を共感的に聞くことが出来るようになり、『自分が相手に受け入れられている』という気持ちも生まれて、コミュニケーションや人間関係が円滑になったと感じます。また、言語活動に意欲的に取り組むことで、言葉の力も高まってきたと感じています」（藤本先生）

次年度以降も研究は続けていく予定だ。「国語を通して身に付いた『学び合い』を他教科に広げていくことも重視したいと考えています」（髙橋校長）

2009年度に実践した2年生の単元の流れを紹介

単元「ことば大好き! ことばあそび! ～詩に親しみ、詩になじみ、詩であそぶ～」（国語14時間、図工1時間、書写1時間）

単元の概要

詩の中でも、ことばあそび（わらべうた、絵かきうた、かぞえうた、早口ことば、あいうえおのうたなど）に親しみ、自分でことばあそびをつくり、グループで協同して作品集（アンソロジー）を作成。その中から各グループが一つの作品を選び、クラス全員の前で発表する。

育てたい力

- ◯ことばあそびの特徴をとらえ、分類する力
- ◯ことばあそびの詩を正しく書き写したり、編集する力
- ◯楽しみながら自分でことばあそびをつくる力
- ◯聞き手にも楽しめる、参加型の発表をする力

単元のねらい

１年生では、物語をつくる学習などを通して、長文を書くことに慣れさせた。２年生では言葉を吟味する力を育てたいと考え、学習の素材として詩を多く扱う。

１学期はいくつもの詩を視写し、自分の好きな詩を集めてアンソロジーの編集を行った。２学期は詩の「継承」から「創造」に移行し、自分で詩をつくる力を付けるため、この単元を設定。詩の中でも「ことばあそび」を選んだのは、２年生の発達段階を考慮し、言葉のリズムを体感して、「日本語って面白い」「言葉は楽しい」と感じられる時期だと判断したためだ。

「参加型」の学習スタイルも重視する。「もともと『ことばあそび』は、相手がいるから楽しめるもの。楽しく伝え合うことで人間関係の潤滑油になればと考えました」（藤本先生）

指導の流れのポイント

まず、教師が、単元の最後に設定したことばあそびの発表会「ことばあそびシアター」を実演する。子どもの意欲が高まったところで、「シアター」をつくるためには、まず「ことばあそびアンソロジー」をつくることが必要だと伝え、言語活動に入る。

「最初に目標をイメージさせて『自分もして、他の人に伝えてみたい』という気持ちを起こさせます。教師の体験を伝えながら『そのために何をすれば良いか』を考えさせて学習の課題設定に結び付けます」（藤本先生）

見本の提示は、学習に不安がある子どももまねすることから学習を始められるという利点もある。

詩をつくる準備として、多くの詩を読み、書き写し、音読させる時間を設定。グループごとに行われるアンソロジーの作成では、「編集会議」という話し合いの場で、協同的な学びを行う。

発表会では、「どうすれば観客を楽しませられるか」という視点から、グループごとに演出を考案。最後に振り返りの場を設定し、活動を通して、どのような力が身に付いたのかを自覚させる。

教師の振り返り

発表前の練習時間はあまり多く取っていないにもかかわらず、すべてのグループの子どもが内容を暗記して「ことばあそびシアター」に臨んだ。「家で自主的に練習した子どもが多かったようです。活動を楽しんでいた表れだと思います」と藤本先生は話す。

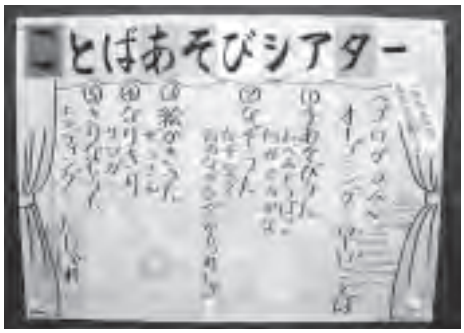
恥ずかしがり屋で、以前は自分をうまく表現できなかった子どもがグループの中心になり、立派に発表した姿も印象的だったと藤本先生は振り返る。

「ことばあそびを覚えて練習するうちに楽しくなり、『自分にも出来る』と自信を深めたようです。このように言語活動は、子どもの新しい面を開花させる可能性があります」

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

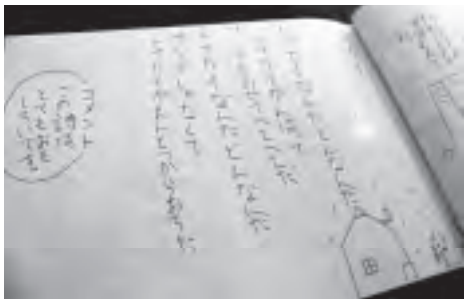
単元の流れ

過程	時	主な活動とねらい	教師の工夫
第1次 発表会への意欲を高め、目的を持って言語活動を構想する力を育む	1	◎教師が実演することばあそびの詩の発表会「ことばあそびシアター」を楽しむ❶ ねらい ● ことばあそびの詩の世界に引き込む ● 参加型の活動の楽しさに気付く ● 学習のゴールのイメージを鮮明にする  教師の見本の「ことばあそびシアター」のプログラム ◎感想を二人組、およびクラス全体で話し合う❷ ねらい ● 学び合いの機会をつくる	❶ ● 実演は２年生の５人の担任が協力し、各クラスで実施。事前に何度も練習し、子どもが楽しめる表現方法を検討した ● 発表会形式にしたのは、相手の反応を見ながら表現することを学ぶため ● 子どもには事前に説明せず、突然実演を見せて、ことばあそびの世界に引き込んだ ❷ ● 二人組の対話学習を取り入れ、全員が学習に参加できるようにした
	2	◎学習全体の計画を立てる❸ ねらい ● 子ども自身が学習の見通しを持つ 学習計画。写真はウェブサイトで拡大してご覧いただけます http://view21.jp/s9411/ ◎「ことばあそびシアター」で発表する詩を選ぶために教師が編んだ「ことばあそびアンソロジー」の見本を見る❹ ねらい ● 活動への意欲を高め、活動のイメージを持つ 「ことばあそびアンソロジー」の見本	❸ ● 「ことばあそびシアター」をするために、教師がどのような準備をしたかを子どもが考えるようにした ● 子どもの発言を集めて学習計画を作成し、模造紙にまとめて教室に掲示した ❹ ● アンソロジーを編むためには何をしたら良いかを考えるようにした（１学期にもアンソロジーを編んだ経験から、「たくさん本を読む必要がある」などの意見が出された） ● 見本は、学年の教師が共同で作成。「子どもが好きになりそうな詩」「見本にしてもらいたい詩」といった視点で分担して選び、それぞれの自作の詩も加えた

ことばあそびアンソロジー

- 各ページに1編の詩をイラストと共に手書きした作品集
- クラスごとに1冊を作成。それぞれの子どもが選んだお気に入りの詩と自作の詩を1編ずつ掲載
- 「わらべうた」「絵かきうた」「かぞえうた」「早口ことば」「あいうえおのうた」など、10ほどの項で構成（項の種類は子どもが選んだため、クラスによって多少異なる）。たくさんの項を設けたのは、多様なことばあそびを体験させるため。詩の種類を見分ける力を育てるねらいもある
- グループごとに項を分担してアンソロジーを編むことで、互いの選んだ詩を介して伝え合う喜びを感じられる
- 「本づくり」を体験させるため、「前書き」「目次」「本文」「後書き」「奥付」など、書籍の体裁に近付けた。また「編集会議」「出版」などの言葉を使って活動への意欲を引き出した

＊「単元の流れ」は、大久保小学校『平成二十一年度 第三十四回 国語公開研究会　研究紀要・学習指導案』第2学年 を基に編集部が作成

過程	時	主な活動とねらい	教師の工夫
第1次	3·4	◎いろいろな種類のことばあそびを読む❺ ねらい ●ことばあそびには多くの種類があることに気付く ●多くの詩に触れ、項について意識を高める。自分で詩をつくる時の発想の土台をつくる	❺●ことばあそびが掲載された250冊の本を市立図書館から借り、廊下に置いて各クラスで共有した（授業以外の時間にも自由に読めるようにした） ●自分が読んだ本のタイトルを項ごとに記録するワークシートを作成し、「たくさん読みたい」という気持ちを起こさせた（九つの項をそれぞれ13冊ずつ読むと、「ことばあそび仙人」に認定される仕組みをつくった）
第2次 詩の特徴に気付き、自分で詩をつくる力や互いの考えに共感しながら学び合う力を育む	5·6	◎アンソロジーを編むために、グループ分けと項の分担をする❻ ◎全体で項の確認をする ◎グループごとに１回目の「編集会議」を行い、アンソロジーの構成などについて話し合う ねらい ●学び合いを深める	❻●希望を募り、３～４人のグループごとに一つの項を担当。当初は項によって人数の偏りが出たが、「楽しい発表会のための」という目的を再度強調し、話し合いにより均等に分けた
	7·8	◎ことばあそびの詩をつくる❼ ねらい ●詩をつくる楽しさを実感する  子どもがつくった詩 ◎二人組で詩を発表し、感想を伝え合う❽ ねらい ●一人で考えるより、友だちと一緒に考える方が良いアイデアが浮かぶことを実感する	❼●自分で詩を書くのが難しい子には、最初の１行を教師が一緒に書くなどして対応。それでも難しい場合、教師が書いたものをなぞって書かせた ●詩にコメントを添えるようにした。他の子どもにとって身近に感じられるため ❽●教師が対話の見本を見せ、「私の詩の中で特に好きなのはここ。理由は……」など、まずは良い点を中心に話すと良いと伝えた。また、相手の作品を出来るだけ褒めることや、もっと良い書き方があったらアドバイスするように助言した ●感想を伝え合った後で、詩を修正する時間を設けた。友だちのアイデアを取り入れることで、作品が良くなることを実感させるのがねらい
	9	◎２回目の「編集会議」を行い、アンソロジーに掲載する詩や順番などについて話し合う❾	❾●どのような思いで詩を選んだかをよく話し合うようにした
	図工	◎ことばあそびの詩から想像した絵を各ページに描く	
	書写	◎詩を丁寧に清書する	
第3次	10·11	◎「ことばあそびシアター」を成功させるための演出の仕方を考え、練習する❿ シナリオ、発表作品の選択、時間配分、演出の仕方の工夫、聞き手を参加させる方法など ねらい ●聞き手を意識しながら表現する方法を学ぶ	❿●「参加型」であることを意識させて、作品の丸暗記ではなく、楽しく工夫した演出を考えるようにした ●教師の発表を想起させ、発表の知恵に気付くようにする。教師が作成したシナリオを見せ、見本として使っても良いと伝えた ●発表作品は、本から選んだ詩でも、子どもがつくった詩でも、どちらでも良いことにした（聞き手を楽しませる作品を選ぶことを優先させた）

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

過程	時	主な活動とねらい	教師の工夫
第3次 聞き手を巻き込む演出を考え、表現する力と学習を振り返る力を育む	12・13	◎「ことばあそびシアター」を開催する⑪ ねらい ● クラスが一体となってことばあそびを楽しむ ● 聞き手を楽しませる表現の仕方を身に付ける ● 相手の話をよく聞いて、適切に反応することを学ぶ 「ことばあそびシアター」	⑪ ● 「聞き手を楽しませる」というめあてを確認し、そのために聞き手の反応を見ながら語ること、自分たちも良い聞き手になることを確認 ● 教師も聞き手の一人となり、良い聞き方の見本を示した ● 発表の仕方や聞き方が良かった子どもの姿を紹介した
	14	◎学習を振り返り、ことばあそびを通して身に付いた力やことばについて気付いたことを発表する⑫ ねらい ● ことばあそびの面白さや価値、魅力に気付く ● 編集会議や発表会で身に付けた知識を自覚する 「ことばあそびシアターを成功させるコツ十ヶ条」 写真はウェブサイトで拡大してご覧いただけます http://view21.jp/s9412/	⑫ ● 「ことばあそびシアター」を開催した時の苦労や楽しかったことを思い出すように助言した ● 参加者に楽しんでもらうためには何に気を付ければ良いかをクラス全体で話し合うようにした ● アンソロジーを編む過程や発表会を開く過程で学んだ知恵を自覚できるように、「ことばあそびシアターを成功させるコツ十ヶ条」をまとめた

14時間目　2年1組の「ことばあそびシアター」の様子を紹介

「コミュニケーション」と「学び合い」を実感した発表会

「皆さん、わらべうたを知っていますか。『通りゃんせ』を歌いますので、聞いてください」

４人の子どもが声を合わせて元気良く歌い始め、昔ながらの遊び方を発表した。他の子どもたちは、一緒に口ずさんだり、歌に合わせて体を揺らしたり、楽しそうに耳を傾けている。歌い終わると、「知っている人は一緒に歌ってください」と呼び掛け、聞き手の中から数人を選んで遊びに加え、もう一度、歌い始めた。多くの子どもがこれまでの活動を通して歌を知っており、教室中に歌声が響いた。

他に「あいうえおのうた」「早口ことば」「れんそううた」「かぞえうた」など、９組のグループが演出を工夫しながら、ことばあそびを発表。「参加型の活動を楽しむために、発表の仕方だけでなく、聞き方の指導にはとても力を入れました。皆がしっかり聞いて良い反応を返せたので、発表した子どもも満足できたようです」と担任の藤本先生は話す。

最後に藤本先生が「感想を言える人はいますか？」と問うと、多くの子どもが挙手。数人の子どもが「皆でアドバイスをし合ったから、うまく出来た」と話した。教師のねらい通り、ことばあそびを通じて学び合いの良さを実感し、学習を深められたようだ。

※4年生を聞き手としてつくられた「ことばあそびシアター」だが、この日は学級内の友だちに発表した

「言語活動の設定プロセス」で「ぶれない言語活動」を実施

岩手県 奥州市立衣川（ころもがわ）小学校

奥州市立衣川小学校では、各単元を通して身に付けさせたい「7つの読解力」を明確にした。それを単元ごとに列記した、年間の「指導事項マトリクス」と「言語活動を設定するプロセス」の明文化により、「7つの読解力」の定着を図っている。

課　題

知識・技能を活用する力に課題

同校、研究主任の吉田よしみ先生は、基礎・基本の定着度は高いが、活用を苦手とする子どもが多く、また、自分なりの考えを自分なりの言葉で伝える力に課題があると感じていた。「教えたことはきちんと覚えますが、『覚えたことを使って自分で考えてみましょう』と言うと困ってしまう子どもが多い。活用する力を育てなければ、本当に学んだことにはならないと感じました」と話す。

文部科学省「全国学力・学習状況調査」の正答率でも、A問題は比較的高いがB問題に課題が見られ、知識・技能を活用する力の弱さが浮かび上がった。藤川ひとみ校長は「学力調査を受ける6年生だけでなく、1年生からの指導を見直す必要性を感じました」と説明する。

研究テーマ

習得・活用の双方の強化を図る

学びを実生活に生かせる力・自分の考えを豊かな言葉で表現する力を付けるため、「主体的に読み、目的に応じて自分の言葉で豊かに表現する子どもの育成」を研究テーマに設定。国語科を中心に習得した知識・技能を活用する言語活動を充実させることにした。

「基礎学力の更なる強化と同時に、相手や目的に合わせて自分の考えを話せる子どもの育成を目指しています。そのような力を付けることで、他教科を含むすべての教育活動に良い影響が出るものと考えています」（吉田先生）

司会の子ども2名が前に座り、授業を進める（P.15 3 参照）

School Data

◎2006年に3校が統合して開校。田園や森林などが豊かな環境にある。衣川中学校や幼保一体施設「あゆみ園」と近接し、交流が盛ん。家庭や地域と課題を共有し、解決を目指す「衣川小学校コミュニティ・スクール」にも力を注ぐ。

校長　藤川ひとみ先生
児童数　129人　　学級数　8学級（うち特別支援学級2）
所在地　〒029-4332　岩手県奥州市衣川区古戸414-1
TEL　0197-52-3202
URL　http://school.city.oshu.iwate.jp/koromokawa-e/
公開研究会　2011年度に予定

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

「目的に応じて表現する力」を付けるための実践

1 身に付けさせたい力の明確化・重点化

まず子どもに身に付けさせたい力を明確にすることが必要だと考え、「７つの読解力」として整理。検討段階では、ＰＩＳＡ型の「読解力」も考慮した。更に、学年ごとに年間の各単元の指導事項を整理した「指導事項マトリクス」を作成。「７つの読解力」を組み込み、身に付けさせたい力の重点的な指導に役立てている。

力の確実な定着のため、基礎・基本を固め、実生活での運用を意識した時間も別枠で設けた。漢字・語彙（ごい）の指導で書く力を底上げする「ことば１」、対話活動を通して自分の考えを論理的に伝え合う力を高める「ことば２」、授業で十分に指導できない表現様式を全校一斉で指導する「衣小タイム」がある。

2 「言語活動を設定するプロセス」の明文化

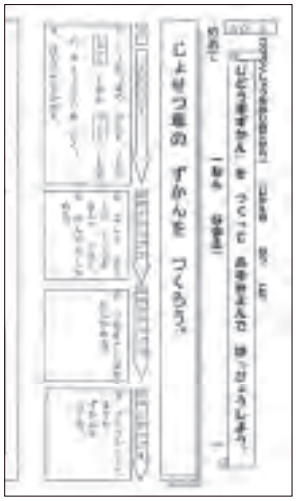
学んだ知識を基に、目的に応じて自分の言葉で表現できるようにするためには、言語様式を明らかにした言語活動の設定が大切だと考える同校。「目的や相手に応じた話し方は、言語活動を通して表現の様式をしっかり意識させることで育っていくと考えています」と吉田先生は説明する。その目的から「ぶれない言語活動」を設定するために、「言語活動を設定するプロセス」を明文化した。

3 子どもが主体的に学習を進めるための工夫

子どもが主体的に学ぶ力を育むため、授業では子どもが司会･進行を担当（P.14写真）。休み時間に教師と打ち合わせ、クラスの実態に合わせて教師が作成した進行シナリオを基に授業を進める。「シナリオを読み取って話す力を育成すると共に、子どもに『自分たちで学んでいる』という意識を持たせるのがねらいです」と吉田先生。

見通しを持って学ばせるため、学級全員に授業の冒頭で学習の流れが書かれたワークシート（図1）を配布。思考の流れを記入するスペースを設け、子どもが自分の思考に沿って学習を進められるようにしている。

図1　ワークシート



1 身に付けさせたい力の明確化・重点化、2「言語活動を設定するプロセス」の明文化の具体的な取り組みは、P.16～19をご参照ください

奥州市立衣川小学校
吉田よしみ Yoshida Yoshimi
研究主任。1学年担任

奥州市立衣川小学校校長
藤川ひとみ Fujikawa Hitomi

成果

学習内容を自ら活用する意識が向上

子ども主体の活動を通じ、子どもの姿は変わりつつある。「勉強は教えられるものではなく、自分たちで学び進めるものであり、学んだ内容を宿題など他の学習に生かそうとする姿勢が育っています」と吉田先生。

教師には、子どもに付けたい力や、表現様式を明確にして言語活動を設定する意識が根付いた。その成果は子どもの様子から垣間見ることが出来る。「子どもが作る委員会だよりや児童総会の発表では、以前に比べ、『誰に何を伝えたいか』という視点が明確になってきました」と藤川校長は評価する。

身に付けさせたい力の明確化・重点化

「7つの読解力」の設定で付けさせたい力を明確化

子どもに身に付けさせたい力を明確化するため、実生活に生かせるという点を重視して「７つの読解力」を設定した。検討段階ではＰＩＳＡ型「読解力」を分析。今後はテキストの内容を理解するだけに終わらせず、意見を述べたり、表現したりする力が必要であると考え、「７つの読解力」に反映させた。

7つの読解力

1比べる力
読み手の視点に沿って複数のテキストを比べて読み、異同から表現様式の特質を理解する力

2調べる力
取材し、要点をメモしたり、資料や材料を探して見つけたり、必要な部分を整理したりする力

3要約する力
目的に応じて話や本、文章などの要点を短くまとめる力

4引用する力
目的に応じて文章の一節や語句、図表、グラフなどを効果的に引いてくる力

5図読・図解する力
目的に応じて絵や写真、表などから必要な情報を取り出したり、図と文章と関連付けて読んだりする力

6発表する力
自分の感じたことや意見、考えたことなどを再構成し、相手に伝える力

7評価する力
テキストの内容の信頼性や客観性、引用や数値の正確性、表現方法の効果といった視点から、良さや妥当性を判断する力

＊衣川小学校「児童に身につけさせたい読解力の明確化について」を基に編集部が作成

「指導事項マトリクス」で指導を重点化・系統化

「７つの読解力」を満遍なく確実に身に付けさせることを目的に、「指導事項マトリクス」を作成した。年間の、単元名・新学習指導要領に示されている「指導事項」・「身に付けさせたい力」を整理し、「表現様式」や実施する「言語活動」を検討する。「どのような力」を「どのような活動・指導」で身に付けさせるかが一目で分かるようにした。

「指導の重点化と共に単元の系統化を進めるのに非常に有効です。今後は、より学年間の系統を意識して改善していきたいです」（吉田先生）

月	時数	単元名	身に付けさせたい力							様式	A 話すこと・聞くこと					B 書くこと					C 読むこと						
			比べる力	調べる力	要約する力	引用する力	図読・図解する力	発表する力	評価する力		ア	イ	ウ	エ	オ	ア	イ	ウ	エ	オ	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
		合計229時間（書写・衣小・ことば除く）								表現様式																
9	9	じどう車ずかんをつくろう	○			○	○			説明文（話題提示―問い―説明）												○				
9	3	ことばで　あそぼう																								

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項										言語活動例															教材名	衣小タイム	ことば❶	ことば❷
ア	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ア	イ	A 話すこと・聞くこと				B 書くこと					C 読むこと									
										ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	オ	ア	イ	ウ	エ	オ				
						○		○							○					○				じどう車くらべ（光村）じどう車のことが書いてある本	❻説明文を書こう	15「漢数字」シート	⑱自分の考え「じどう車くらべ」
								○																ことばで　あそぼう（光村）		16「カタカナ」シート	⑲自分の考え「係の仕事」

＊上記図は簡略化しています。全体図はウェブサイトでご覧いただけます。また、加工可能な形でダウンロードできます。http://view21.jp/s9413/

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

「言語活動を設定するプロセス」の明文化 例:1年生「じどう車ずかんをつくろう」

❶児童の実態を明らかにする

◎興味・関心・態度
- 女子は比較的書く活動が好きである
- 男子は乗り物に興味・関心がある

◎既習事項・内容
- 教科書のパターンで「とりのくちばし図鑑」を作ること
- 絵や写真と結び付けて文章を読むこと

◎身に付いている言語能力
- ひらがなを読める
- 視写をすることが出来る
- 教師の支援を得ながら大体の内容を理解できる

◎まだ身に付いていない言語能力
- 文と文をつなげて書くこと
- 友だちの考えと自分の考えを比べること
- 図書から、必要な事柄を読み取ること

言語活動で付けたい力、そのための活動内容や指導方法を検討する出発点となる

❷単元で身に付けたい力を確認

◎時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと

学習指導要領の指導事項に示された言語能力を教科書教材を基に確認する

❸単元で身に付けたい力を具体化・細分化(「7つの読解力」と関連させる)

◎身に付けたい力(上位能力←下位能力)を分析
- 時間的な順序を考える力←時間的な順序を表す言葉の習得
- 事柄の順序を考える力←順序を考えるためのキーワード、キーセンテンスを見つける力(4)←事柄を読み取る力
- 内容の大体を読む力←文や言葉と写真や絵を結び付ける力(1、5)←言葉のまとまりごとに音読する力←ひらがなや必要なカタカナ、漢字を読む力

◎「7つの読解力」との関連を確認
4→引用する力　1→比べる力　5→図読・図解する力

身に付けたい力の下位能力を考えていく。この作業により、どのような表現様式の活動が適切かが見えてくる

❹「表現様式」を明らかにして、言語活動を設定

【表現様式】
説明文{話題提示ー説明(特徴ー理由)}
【言語活動】
自動車図鑑を作って「あゆみ園」で発表する ーひとまとまりの言語活動(大きく見て「活用」)
- 音読する
- 目的に応じて本や文章を読む
- 自動車図鑑を作る
- 発表会をする ー言語活動を支える言語活動(大きく見て「習得」)

表現様式(報告文、観察文、説明文、手紙など)や活動の機能(記録、説明、報告、紹介)の両面から検討。表現様式を明らかにすることで、言語活動を支える知識・技能が明らかになる

❺言語活動を支える知識・技能を明らかにする(言語活動を終えると身に付いている状態になる)

◎音読する
- ア. ひらがなの習得
- イ. 必要なカタカナ・漢字の習得
- ウ. 言葉のまとまりごとに読む
- エ. はっきり、句読点に気を付けて読む

◎自動車図鑑を作る
- ア. 目的に応じて文章を読む
- イ. 文末表現に注意して読み、何の事柄が書かれているか分かる
- ウ. 絵や写真と言葉や文を結び付ける
- エ. 大事な言葉、文を必要に応じて書き抜く
- オ. 必要な接続詞が分かる

◎発表会をする
- 話し方
  - ア. 相手に聞こえる声の大きさで話す
  - イ. 聞き手の方を向いて話す
  - ウ. 相手のことを考え、はっきり、ゆっくり話す
  - エ. 関連する絵や写真の部分を指し示しながら発表する
- 聞き方
  - ア. 話す人の目を見て、うなずきながら聞く
  - イ. 評価しながら聞き、感想を述べる

❸で具体化・細分化した身に付けたい力や、「7つの読解力」と一致するかを見ることで、言語活動の妥当性を確認(この中には既に身に付けている知識・技能もある)

❻教材文を選定する

「じどう車くらべ」(光村図書 1年上)
「はしご車」「ポンプ車」「移動販売車」「図書館バス」「除雪車」「ショベルカー」について書かれた文章及び写真

教科書や本などの他、必要に応じて教師が自作する

❼指導計画の作成

◎つかむ――課題意識の醸成。学習課題を設定。学習計画を立てる
◎ふかめる―思考を伴う言語操作によって、言語活動を行うために必要な知識・技能を習得(言語活動を支える言語活動)
◎つくる――自動車図鑑を作る
◎ひろげる―発表し交流する。自己評価・相互評価し、身に付いた力を確認する

「習得」と「活用」を踏まえ、「つかむ」「ふかめる」「つくる」「ひろげる」のプロセスで検討する

*衣川小学校「言語活動を設定するプロセス(例『じどう車ずかんをつくろう』)」を基に編集部が作成

2009年度に実践した1年生の単元の流れを紹介

「指導事項マトリクス」で身に付けさせたい力を確認し、「言語活動を設定するプロセス」を経て授業をつくる同校。授業の流れを、「じどう車ずかんをつくろう」を例に紹介する。

単元「じどう車ずかんをつくろう」(国語９時間、生活科２時間)

単元の概要

「じどう車ずかんをつくろう」を目標に掲げ、単元の最後に近接する幼保一体施設「あゆみ園」を訪れ、調べたことを発表する。そのために、自動車に関する教材文を読み、自動車の特徴や説明文の書き方を学び、それを生かしていく。

育てたい力

- 「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読む」力
- 複数の文章を読んで共通点を見つける力
- 接続語「そのために」を用いてつながりのある文章を書く力
- カタカナで書く語を読んだり書いたりする力

単元のねらい

１学期に「たのしいとりのだいひゃっか」（とりのくちばし図鑑）を作り、「問い」―「答え」という説明文の基本を学んだ。本単元では、さまざまな車の「しごと」と「つくり」が、「話題・問題提起」→「問題に対する答え」として書かれているのを読み取り、内容を理解すること、図鑑を作る作業を通して、説明文への理解を深めることをねらう。09年度の「全国学力・学習状況調査」では、文の意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書く問題などの正答率が低かった。それを踏まえ、接続語である「そのために」の使い方を学び、図鑑作りに生かす活動を取り入れている。

指導の流れのポイント

単元の冒頭で、以前に作った「たのしいとりのだいひゃっか」を思い出させると共に、教師が作った「じどう車ずかん」の見本を見せて、関心・意欲を引き出した。続いて、教師の支援の下、子ども自身に学習計画を立てさせ、学習の見通しを持たせた。

その後は、教科書を使って図鑑作りに必要な要素を読み取る力を身に付けながら、図鑑作りを進めた。その際、常に前時の学習を想起させることによって、学習内容が次の時間に生かせることに気付かせた。

最後に、幼保一体施設「あゆみ園」で調べたことを発表する機会を設けることで、関心・意欲の持続を図った。

教師の振り返り

指導計画に習得・活用の流れを明記したことにより、どこで習得した力をどこで活用するかが意識できた。習得した力を整理して掲示し、毎授業の最初に振り返らせることで、一人ひとりの習得を深められた。更に、前時までの学習内容では解決できない課題を与え、新しい力を子ども自身が発見する場を与えた。

一方、「読む力」と「書く力」の両方を目標に設定したことは検討が必要であったと吉田先生は振り返る。「『書く力』の育成も目標であれば、文章の構成を考えたり、文章を書いたりする言語活動を盛り込む必要があったと思います。ただ、設定時数内でこれらの活動を行うのは難しく、『書く力』については別単元での指導が妥当でした。年間を通じた指導事項と言語活動との整合性の確認の重要性を改めて感じました」

移行措置対応のポイント
第4回

言語活動を通じてつくる国語の授業

単元の流れ

段階	時間	主な学習活動	教師の工夫
つかむ	1	❶以前に作った「たのしいとりのだいひゃっか」のことを想起する。教師は、好評だったことを伝える ❷教科書の「じどう車くらべ」を読み、どのような活動をしたいかを考える ❸学習課題を設定する ◎「じどう車ずかん」をつくって「あゆみえん」(近隣の幼保一体施設) で発表しよう ❹新出漢字、カタカナの練習をする	❶出来上がった時の気持ちも想起させた ❷絵本やクイズに書き換える活動のアイデアも出ると想定されたが、教師が作った見本を見せて「図鑑を作りたい」という気持ちが起こるようにした
ふかめる	2	◎「じどう車ずかん」をつくるためのがくしゅうけいかくをたてよう ❶「たのしいとりのだいひゃっか」を作った時の学習計画を参考にして、教師が支援しながら学習計画を立てる	❶図鑑を作るために必要な学習や効果的な学習の流れを考えることで、学習計画を作っていった ❶「ひろげる」段階の2時間は、生活科「こんなにできるようになったよ」の一部として計画した
	3 習得	◎「じどう車ずかん」のつくりかたをしらべよう ❶教科書の全文を音読する ❷どのような自動車について書かれていたかを確認する(バスと乗用車、トラックなどについて書かれている) ❸「バスと乗用車」と「トラック」について書かれた文を比べて読み、共通部分を見つける ❹自動車の「しごと」と「つくり」について書かれていたこと、どちらにも「そのために」という言葉が使われていたことを確かめる	❸どちらの文にも「しごと」と「つくり」について書かれていることに気付くようにした(比較の視点) ❹「そのために」の「その」が指す内容を確認した
	4 習得・活用	◎「バスやじょうよう車」のずかんをつくろう ❶前時の学習を想起する ❷学習段落を音読する ❸読み取る視点を確認し、「しごと」と「つくり」に線を引く ❹文と関係している絵の部分を線でつなぐ ❺ワークシートにまとめ、図鑑を作る ❻「しごと」と「つくり」を読み取る時にヒントになるキーワードを確認する	❶前時を想起させることによって、学習したことが本時の学習に役立つことに気付くようにした ❸❹「しごと」が書いてある文に赤で、「つくり」が書いてある文には青で線を引き、文と関係している絵の部分を線でつなぐ活動をすることによって、内容の大体をつかませた ❻「……しごとをしています。」の文と、「そのために」の言葉が手掛かりになっていることを確認した
	5·6 習得・活用	*「トラック」「クレーン車」の図鑑作りを前時と同様に実施	
つくる	7 習得・活用 8 活用	◎じぶんのすきなじどう車のずかんをつくろう ❶前時までの学習を想起する ❷資料を読む(教師の自作資料を使用) ❸読み取る視点と、キーワードを確認する ❹「しごと」と「つくり」が書いてあるところに線を引く ❺文と関係している絵の部分を線でつなぐ ❻カードにまとめる	❷資料は教材文と形式が異なるものを準備し、「しごと」と「つくり」を読み取る力を付けた ❸❹❺同じ自動車を選択した児童同士でグループを作って学習することにより、分からないところを教え合うことが出来るようにした
	9	◎ずかんをかんせいさせ、よみあおう ❶表紙と目次を作る ❷友だちの図鑑と交換して読み合い、感想を伝える	❶表紙と目次はカードを使用し、時間をかけずに出来るようにした ❷例文を与え、良かったところを口頭で伝えるようにした
ひろげる	10	◎はっぴょうのれんしゅうをしよう ❶どのような発表の仕方が良いかを話し合う ❷発表の練習をする	❷あゆみ園の園児たちに分かりやすいように、自動車の拡大写真を使用。発表する内容と写真の部分が一致するように発表の練習をした
	11	◎あゆみえんのこどもたちによんできかせよう ❶あゆみ園の園児たちに自分たちが調べた自動車について発表する ❷学習のまとめをする	❶相手が聞きやすい声の大きさや速さを意識させた。絵を指し示しながら説明するようにした ❷自動車について書かれた本を紹介し、さらに読書を進めるきっかけをつくった

*衣川小学校「第1学年国語科学習指導案」を基に編集部が作成

ベネッセのデータでみる 子どもと教育

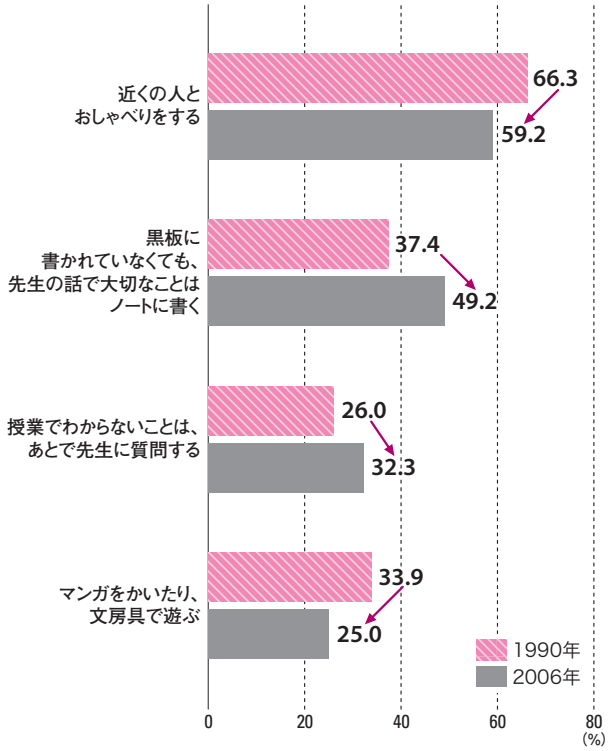
第4回

学習習慣・学習意欲

全国的に見て、子どもの学習行動や意識にはどのような傾向が見られるのだろうか。ここでは、子どもの授業や家庭学習に対する意識、成績の違いによる意識の差に関するデータをまとめた。

1 まじめに授業を受ける子どもが増加

授業の受け方（5年生）



◎子どもたちが授業を受けている様子を1990年と比べると、「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」の回答比率が増加している。

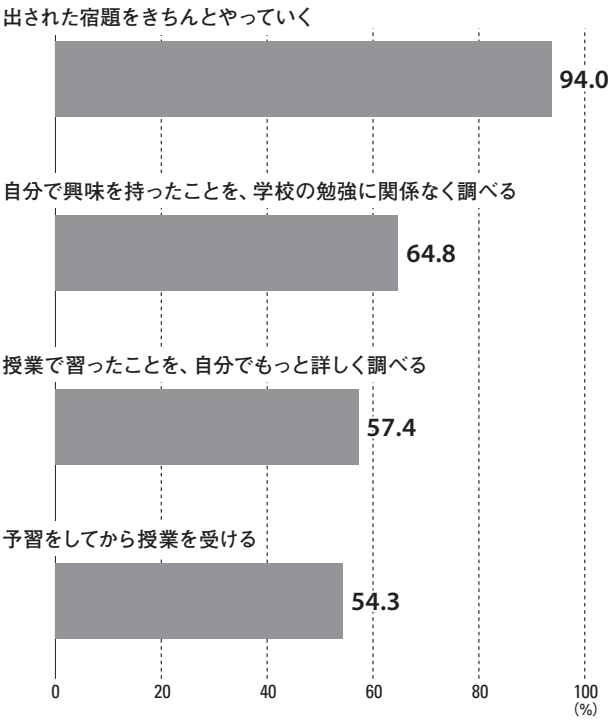
一方、「近くの人とおしゃべりをする」「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」が減少している。授業中の逸脱行為が少なくなり、全体的に以前より授業をまじめに受けている様子がうかがえる。

＊数値は「よくある」と「時々ある」の合計

出典／「第4回学習基本調査・国内調査」Benesse教育研究開発センター

2 94%が「宿題はきちんとする」

家での学習の様子（5年生）



◎家での学習の様子を見ると、94%が「出された宿題をきちんとやっていく」と回答している。

一方、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」などの回答はそれほど多くなく、言われたことはきちんとするものの、自主的に学びに向かう態度がやや弱い様子もうかがえる。

＊数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計
＊全17項目より抜粋

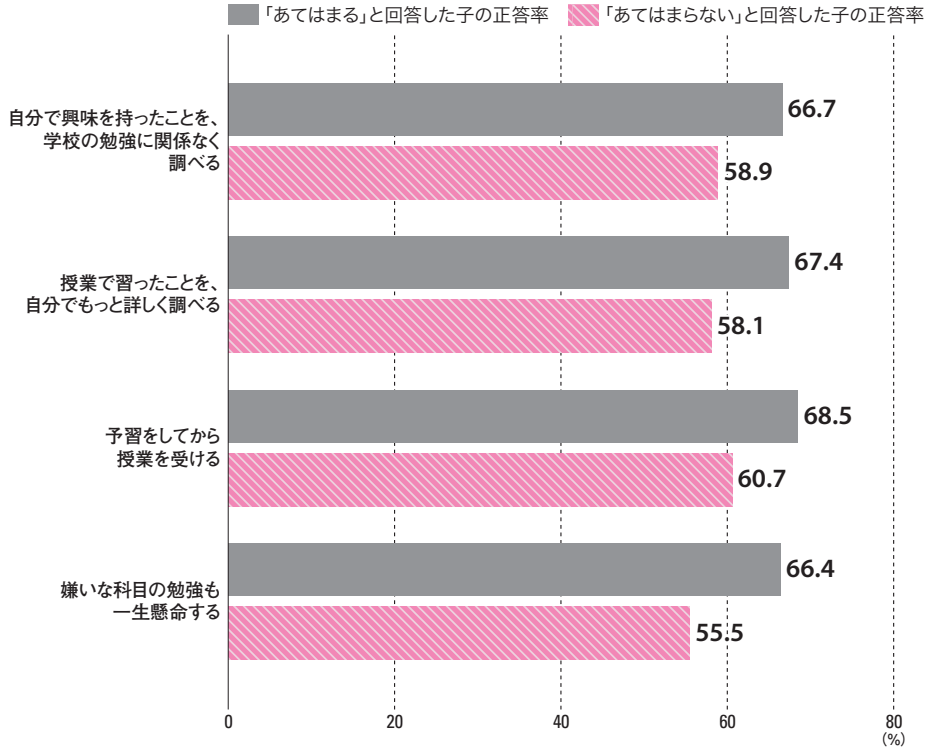
出典／「第4回学習基本調査・国内調査」Benesse教育研究開発センター

本コーナーで紹介している調査結果の詳細はウェブサイトでご覧いただけます

第4回学習基本調査・国内調査
http://view21.jp/s9421/
第4回学習基本調査・学力実態調査
http://view21.jp/s9422/
※第2回子ども生活実態基本調査は3月上旬公開予定です

3 課されたこと以外の学習にも取り組む子どもは正答率が高い

家での学習の様子と成績の関係（5年生・算数）



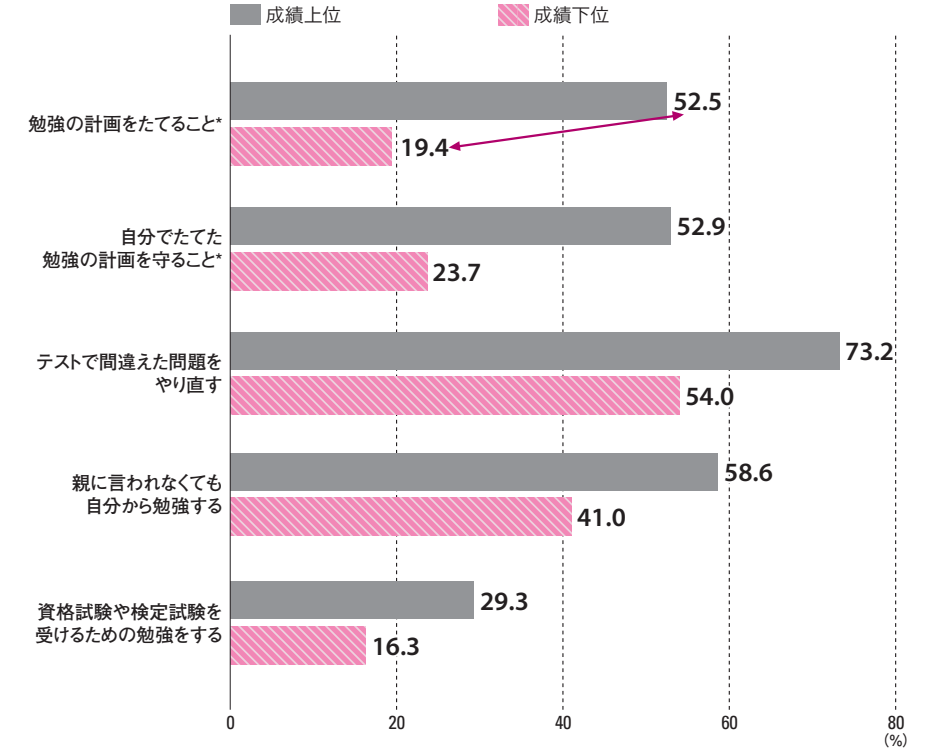
◎グラフは、学力調査の結果（平均正答率）を、学習の様子別にみたものだ。例えば、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」という問いに「あてはまる」と答えた子どもは、そうでない（「あてはまらない」）子どもよりも正答率が高い。与えられた課題以外の学習にも積極的に取り組んでいる子どもの方が正答率が高いことが分かる。

＊全13項目より抜粋

出典／「第４回学習基本調査・学力実態調査」Benesse教育研究開発センター

4 成績上位の子どもは自主的に学習に取り組む

勉強の取り組み方（4～6年生・成績別）



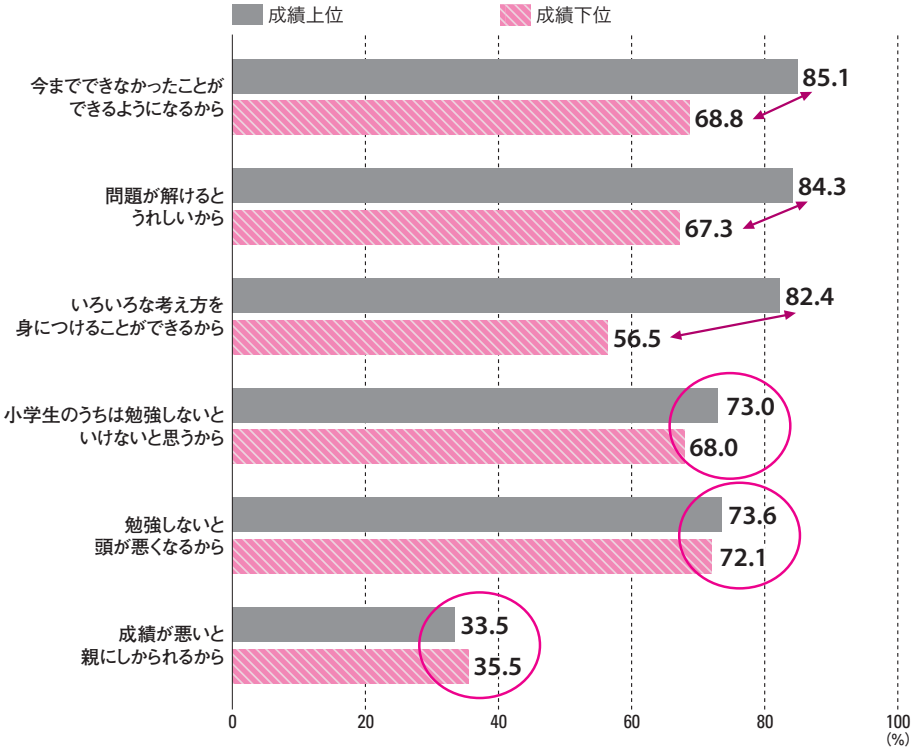
◎成績（子どもの自己評価）によって、学習の取り組み方はどう異なるのだろうか。最も開きがあるのは、「勉強の計画をたてること」。成績上位層は約５割が「得意」と答えているが、成績下位層は２割にも満たない。全体的に見て、成績上位層の子どもの方が、自主的な学習習慣を身に付けていると言える。

＊数値は「とてもそう」と「まあそう」の合計。* 印は、「とても得意」と「やや得意」の合計。成績中位の数値は省略した

出典／「第２回子ども生活実態基本調査」Benesse教育研究開発センター

5 成績上位の子どもの学習理由は、前向きで目的が明確

学習する理由（4～6年生・成績別）



◎成績（子どもの自己評価）によって、学習の動機についてはどう異なるのだろうか。成績上位の子どもほど、「いろいろな考え方を身につけることができるから」など前向きな動機を挙げる比率が高い。一方、「成績が悪いと親にしかられるから」など、受け身な考え方やネガティブな動機には、成績による大きな差は見られない。

＊数値は「とてもそう」と「まあそう」の合計。成績中位の数値は省略した

出典／「第２回子ども生活実態基本調査」Benesse教育研究開発センター

6 宿題の時間は30分強

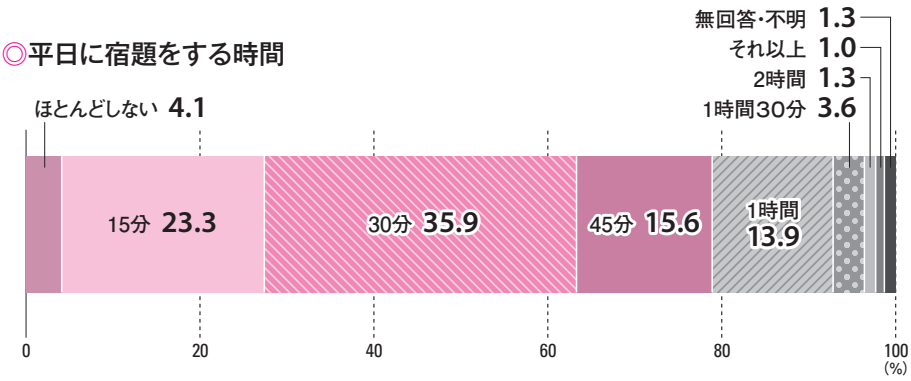
平日１日の家庭学習時間（５年生）

◎宿題をする時間の平均　**36.4分**

◎学習をする時間の平均　**81.5分**

◎学習時間に占める宿題をする時間の比率　**44.7%**

◎平日に宿題をする時間



◎小学５年生が平日に学校外で勉強する時間は、宿題が平均約36分。これに塾や家庭教師などの学習時間や、宿題以外の家庭学習時間も含めると、平均約82分となっている。宿題をする時間の内訳を見ると、１日30分以下の子どもが全体の63.3%を占める。

＊時間の平均は「ほとんどしない」を０分、「２時間」を120分のように置き換えて、「無回答・不明」は除いて算出
＊「学習をする時間」は、学習塾や家庭教師について勉強する時間を含む

出典／「第４回学習基本調査・国内調査」Benesse教育研究開発センター

研修会や保護者会に役立つ！
学習習慣・学習意欲に関する お薦めウェブサイト

文部科学省／国立教育政策研究所

平成21年度全国学力・学習状況調査　調査結果について

http://www.nier.go.jp/09chousakekka/index.htm

◎全国学力・学習状況調査の結果一覧。都道府県別、地域規模別の結果や、知識に関する調査と活用に関する調査の相関なども見られる

特定の課題に関する調査（国語、社会、算数・数学、理科）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032814.htm

◎国語は漢字・長文記述、算数・数学は数学的に考える力・計算力、といったように、各教科の特定の課題に関する学力調査結果や、児童・生徒、教師の意識が分かる

OECD生徒の学習到達度調査（PISA）調査結果

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/pisa/

◎2000年、2003年、2006年の各調査結果の要約。例えば、2006年調査結果では、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーそれぞれの平均得点の国際比較一覧などが見られる

国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2007）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032813.htm

◎小学４年生、中学２年生を対象にした算数・数学と理科の教育到達度を図る国際比較調査。両教科の重要性をどう認識しているかや自信の有無など、子どもの意識が分かる

お茶の水女子大・Benesse教育研究開発センター

教育格差の発生・解消に関する調査研究

http://www.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoiku_kakusa/2008/index.html

◎全国３地域の小学校５年生およびその担任、校長、保護者を対象に行った、学力格差の有無と程度を調べた調査。読書と国語力の相関や、児童と保護者のコミュニケーションの量と学力の関係などがグラフにまとめられている

※上記は2009年12月時点での情報です

1 2 6 出典

「第4回学習基本調査・国内調査」Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2006年６～７月、調査対象は全国３地域［大都市（東京23区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）］の小学５年生2,726人。調査方法は学校通しによる自記式調査

3 出典

「第４回学習基本調査・学力実態調査」Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2006年11月、調査対象は、「第４回学習基本調査・国内調査」の対象者（上記）のうち、小学５年生２,446人、中学２年生1,723人。調査方法は学校通しによる自記式調査（テスト）

4 5 出典

「第２回子ども生活実態基本調査」Benesse 教育研究開発センター
調査時期は2009年８～10月、調査対象は全国の小学４年生～高校２年生13 ,797人（うち小学生3 ,561人）。調査方法は学校通しによる自記式質問紙調査

まとめ

家庭学習指導などを通じて「自立」への働き掛けを

◎まじめ、でもやや受け身

近年、子どもの授業態度はまじめになっているようだ（P.20 1）。94％の子どもが宿題をきちんとこなし（P.20 2）平日に宿題を「ほとんどしない」という子どもは少ない（P.22 6）など、基本的な学習態度は改善しているように見える。日頃のきめ細かな指導の成果だろう。しかし、言われたことには素直にこつこつ取り組むが、自ら進んで学ぼうという意欲や学んだことを更に深めようとする意識・学習行動には、課題も見受けられる。こうした態度や習慣は、成績上位の子どもほど身に付けている比率が高い（P.21 3 4、P.22 5）。

◎「自分で出来ること」を徐々に増やす

少子化や保護者の教育観の変化などにより、保護者と子どもの関係がより密接になっている。例外はあるものの、子どもは家庭内で大切に育てられている。そうした中、ますます大切になってくるのは発達段階に応じた「自立」への手立てだ。生活場面のみならず学習の場でも、自らの意思と意欲で自立的に学習できるように導く必要がある。そのためには、子ども自身で出来ることを徐々に増やし、達成感を積み重ねつつ習慣化できるように、学校と保護者が上手に働き掛けることが大切だろう。保護者に対して「もっと子どもに任せてみてください」などと理解と協力を得る機会を増やしても良いかもしれない。

◎家庭学習習慣は生活習慣でもある

家庭学習指導は、そのきっかけの一つになる。家庭学習習慣は生活習慣でもある。意欲的に自学自習できることが最終目標とはいえ、小学生のうちは学習をきちんと生活の中に位置付けることが先決だ。決まった時間に机に向かい、宿題等に取り組むことは「自立」と「自律」の第一歩。生活習慣付けの一環として、宿題の出し方や指導の在り方などについて、改めて学校ぐるみで検討してはどうだろうか。

Hop! Step! 小学校英語！

実践事例

三重県鈴鹿市立椿小学校

クイズやゲームを工夫し子どもの主体的なコミュニケーション能力を育む

鈴鹿市立椿小学校では、「英語ノート」に盛り込まれたクイズやゲームに身近な素材を取り入れるなどのアレンジを加えている。子どもが意欲的に参加する活動を通じて、主体的なコミュニケーション能力を養うことがねらいだ。

マニュアル化しない「コミュニケーションを楽しむ10のポイント」を作成

三重県の山間部に位置する鈴鹿市立椿小学校は、全校児童数が約150人の単学級校だ。知っている人に会っても、自分からあいさつ出来ないこともある内気な子どもも多いという。英語活動に取り組み始めたのは、1997年に文部省（当時）から小学校英語の研究開発学校に指定されたのがきっかけだ。当初は、多くの子どもが緊張しながら英語を学んでいた。そのため、既習の英語表現であっても、教師の質問に対して言葉を詰まらせてしまい、うまく答えられないこともあった。

子どもの緊張は英語活動を続けていく中で少しずつ緩和され、スムーズに受け答えが出来るようになった。しかし、英語活動に慣れるに従って、マニュアル通りのコミュニケーションにこだわる傾向が見られるようになったという。5年生担任の宮崎みさ先生は、当時の様子について次のように説明する。

「教師が例文を示し、復唱させた後に、子ども同士で同じように活動させます。すると、授業で習った例文と少しでも違う答えが返ってくると、対応出来なくなる子どもが多く見受けられました」

6年生担任の山田幸子先生は、子どもの主体性の欠如も感じていた。

「授業中、子どもは教師に質問されるのを待っているばかりでした。自分から発言しようとする意欲がないことが目に見えて分かりました」

そこで、より自発的に活動に取り組めるようにと、独自に「コミュニケーションを楽しむ10のポイント」（**図1**）をつくった。「相手の話をよく聞く」「相手の目を見て話す」など、コミュニケーションにおいて重要な10項目を挙げ、更に、“Oh.”“Wow.”などの感嘆詞や“Sure.”“Really?”などの相づちの言葉を「Happy Words」として示した。椿小学校の英語活動を主導してきた鷹巣雅英先生は、「Happy Words」によってコミュニケーションにもコツがあることを伝えたかったと説明する。

「ちょっとしたあいさつや相づちが会話をつなぎ、円滑なコミュニケーションに役立つことを教えたかったのです。楽しいコミュニケーションには難しい表現は必要ないことが分かれば、子どもはもっと自分から話すようになると考えました」

「コミュニケーションを楽しむ10のポイント」は、英語活動の度に一人ひとりに配布する「振り返りカー

鈴鹿市立椿小学校
宮崎みさ
Miyazaki Misa
5学年担任

鈴鹿市立椿小学校
山田幸子
Yamada Sachiko
6学年担任

三重県小学校英語活動研究会
事務局代表
（元鈴鹿市立椿小学校講師）
鷹巣雅英
Takasu Masae

ド」の一要素でもある。子どもが、10項目の中から、今日はどの項目を頑張るかを決め、授業の終わりに、目標がどの程度達成出来たかを自己評価する。活動に目的意識を持たせる上で効果的なツールとなっている。

子どもにとって身近な素材をクイズやゲームに活用

自発的なコミュニケーションを支援することに加え、子どもの主体性を更に育むために取り組んでいるのが、「英語ノート」に掲載されているクイズやゲームへのアレンジだ。

5年生のLesson 9の「ランチ・メニューを作ろう」を例に見てみよう。**まず一つ目の工夫は、子どもにとって身近なものを用いて、活動を展開していることだ。**例えば、授業の導入では校歌のメロディーを使ったチャンツによって、子どもを活気付ける。また、近所のスーパーのチラシに載っている生鮮食品がどこの国から輸入された物かをクイズとして出題する。更に、鈴鹿にはブラジル人が多いため、意識的にブラジルの話題を盛り込むなどの実践も行っている。

二つ目の工夫としては、社会科で習った鈴鹿市と外国との交流や家庭科で習う食品の栄養素の種類など、他の教科の学習内容を意識的に盛り込むことである。他教科で習ったことを英語活動に加えることで、教科横断的な知識を形成していくのだ。

三つ目は、その場に応じたゲームを行うと共に、勝敗が毎回変わるように工夫することだ。例えば、既に覚えた単語を確認するには「ビンゴゲーム」、新しい単語を練習するには「キーワードゲーム」というふうに、ゲームの特徴によって使い分けている（**図2**）。

また、子ども同士が目の前に置いた食品サンプルを取り合う「キーワードゲーム」では、単に動作の早い子どもが勝つことがないよう、特定の栄養素のグループに属する食品を取った者の勝ちとするなどの気遣いをしている。

クイズやゲームの実施には次のような効果があると宮崎先生は言う。

「友だちと一緒にクイズやゲームをすることで、子どもは自然と、友だちの良いところを学んだり、前回よりも出来るようになった自分を感じたりします。そうすれば、次回はもっと話したい、学びたいと思うようになり、更に活動にも積極的になるのです」

このような英語活動の成果は、日常生活にも現れているという。

「自発的にあいさつをしたり、英語以外の授業でも積極的に発言したりする子どもが増えてきました。これからも英語活動を通して、子どもの主体的なコミュニケーション能力を育てていきたいと思います。理想は、『コミュニケーションを楽しむ10のポイント』の全項目を全員が実践出来るようにすることです」（鷹巣先生）

図1　コミュニケーションを楽しむ10のポイント

よく聞いて Listen carefully	1	手掛かりになる言葉を見つけながら聞きました。
	2	Happy Wordsを使って、相づちを打ちながら聞きました。
	3	One more time, please. と言って、聞き取れなかったことを聞き直しました。
相手の目を見て Eye contact	4	話し手の顔を見て聞きました。
	5	話し手の言おうとすることは何か考えながら、聞きました。
笑顔で Smile	6	笑顔で聞いたり、話したりしました。
相手に届く声で Clear voice	7	相手に届く声で、はやさを工夫して話しました。
響き合う力 Enjoy communication	8	Happy Wordsを使って、やりとりを続けました。
	9	今まで学習した表現を使って、言いたいことを伝えようとしました。
	10	ジェスチャーや絵などを使って、会話を続けました。

Happy Words　Oh. / Yes. / Nice. / Wonderful. / Very good. / Wow. / Really? / Thank you. / You are welcome. / Good job. / Nice try. / Sure. /Help me, please.

図2　目的に応じたゲームの使い分け

	ゲームの目的	ゲームの概要	指導上の留意点
ビンゴゲーム	既習の単語の確認	① 一人一枚ゲーム用のシートを用意する ② 担任が今回のテーマ（フルーツや動物など）を発表し、児童がそのテーマに沿った単語でシートを埋めていく ③ 担任やALTが単語を発音する ④ 聞き取った単語がシートにあれば該当するマスに丸を付けていく ⑤ 列がそろったら、「ビンゴ!」と言い、手を挙げる	すぐに1列そろってしまう場合と全くそろわない場合があり、授業の時間配分がしにくい
ボンゴゲーム	既習の単語の確認	① 一人一枚ゲーム用のシートを用意する（ビンゴゲームと同じシート） ② 担任が今回のテーマ（フルーツや動物など）を発表し、児童がそのテーマに沿った単語でシートを埋めていく ③ 色画用紙などを切ったチップを各マスの上に置いていく（＊16マスならば、4～8枚が妥当） ④ 担任やALTが単語を発音する。子どもはその単語の上にチップが乗っていないかを確認し、乗っていればチップを取る。乗っていなければ、そのままにする。 ⑤ すべてのチップがなくなった児童は「ボンゴ!」と言い、手を挙げる	チップの枚数を何枚にするかで時間の調整が出来るので、授業案を組みやすい。やや長く時間がかかるため、児童の集中を切らさないようにする
キーワードゲーム	新しく習う単語の練習	① 児童をペアに分ける ② 担任やALTが「キーワード」を決めて、児童に発表する ③ キーワードではない単語の場合は、手拍子をしながら発音を復唱する ④ キーワードが読み上げられたら、復唱をせずに、ペアの間に置かれた物（通常消しゴムなど）を取る	発音の練習が出来ているか留意しながら、ゲームを進める。 勝敗の基準を「早く取ること」だけにしないように工夫する

ゲームを使った英語活動　椿小学校指導案より
「ランチ・メニューを作ろう」(5年生)

Hop! Step! 小学校英語!

■目標
・世界の料理に興味を持ち、世界には多様な食文化があることに気付く
（言葉や文化についての関心・意欲・態度の育成）
・食べ物に関する言葉に慣れ親しむ
・積極的にオリジナル・ランチ・メニューを発表したり、他の児童の発表を聞いたりする
・丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり、伝えたりする（コミュニケーション能力の素地をつくる）

■扱う表現（キーセンテンス）・What would you like?　・I'd like...

■準備するもの
・「英語ノート」1巻末の「食べ物カード」
・食品サンプル（家庭科の教具、レストランなどで置いてあるもの、自作のものなど）

1 イントロダクション

10分

1 英語であいさつし、「椿っ子Greetings」を歌う
Good morning, everyone. / How are you? / What day is it today? / How's the weather today?

2 世界のあいさつと国旗を確認
（「英語ノート」P.6とP.38の復習）

3 担任やALTが「World Trivia」（世界の雑学やニュース）をクイズ形式で紹介

4 担任が「振り返りカード」を配布し、子ども一人ひとりが「コミュニケーションを楽しむ10のポイント」から今日の目標を設定する

point 1
●「椿っ子Greetings」で英語のあいさつなどを確認し、授業へのウォーミングアップとする
●「World Trivia」では、なるべく子どもの生活に密着した題材を取り上げる

2 チャンツ

5分

1 授業や日常生活で使えるフレーズが26個含まれているチャンツ「発表しよう、ほめあおう」*を楽しみながら歌う。チャンツには以下のようなフレーズが盛り込まれている
You can do it. / Do your best. / Let me try. / I liked...

point 2
●この後の授業で使う単語・表現がたくさん出てくるので、しっかり声を出して語彙（ごい）を確認する
●ALTの発音をよく聞いて、英語本来の発音をさせるようにする

＊『リズムでおぼえる 教室英語ノート』
mpi（旧　松香フォニックス研究所）

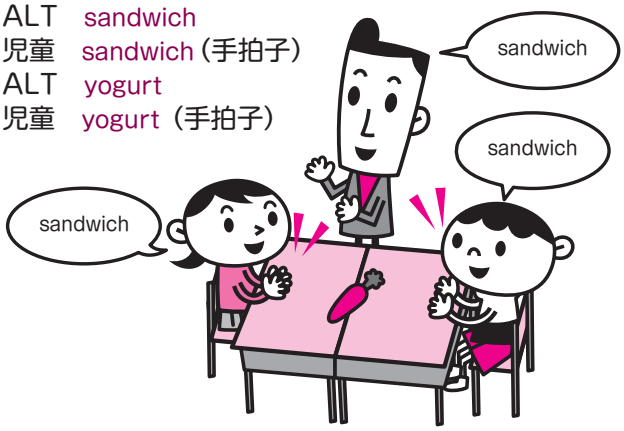
3 キーワードゲーム

10分

1 担任が声を掛ける
Let's play the Keyword Game.

2 班内でペアをつくり、うち一人が担任のところにアイテム（食品サンプル）一つをもらいに行く。全ペアにアイテムが行きわたったら、ボックスからクジ引きでキーワードを選ぶ
児童　Item, please.
担任　Here you are.
児童　Thank you.

3 アイテムをペアの間に置く。ALTが次々に食品の名前を発音するので、手拍子しながら復唱する
ALT　sandwich
児童　sandwich（手拍子）
ALT　yogurt
児童　yogurt（手拍子）



4 最初に決めたキーワードをALTが発音したら、手拍子はせずにアイテムを取る

5 ゲームを何回か繰り返し、最後に家庭科で習った三つの栄養素グループのうち、どのグループの食品を取った者が勝ちかを発表する。全員で勝者に拍手

6 担任にアイテムを返しに行く
児童　Thank you.

5 振り返り

5分

1「振り返りカード」に記入して、今日の目標を達成出来たかどうか確認する

2 数人の子どもを指名し、振り返りの内容を発表させる

担任　How was today's lesson?
児童　I liked the Keyword Game, because...

3「Good-bye Song」を歌い、お別れの言葉を言う

Thank you for the lesson. / See you next time. / Have a nice day.

point 5

- ●発言する子どもが偏らないように、手を挙げてない子どもを指名するなど、均等に発言させるようにする
- ●2の児童の振り返りでは、becauseの後に「友だちの声が大きくて良かった」など、他者の良さを伝えるような話し方を意識させる
- ●英語での表現方法が分からない場合は、May I speak Japanese? としっかり許可を取ってから日本語で話し始めるように習慣付ける
- ●お別れの言葉は子どもに選ばせる

4 アクティビティ

15分

1 別の相手とペアになり、店員の役と客の役に分かれる。客の役の子どもが、24枚の「食べ物カード」の中から好きな食べ物を選び、1分間で独自の「スペシャルランチ」を作る。この場面では担任は特に指示を出さず、子どもに自由に選ばせる

店員　What would you like?
客　I'd like...
店員　Here you are.
客　Thank you.
店員　You are welcome.

2 自分の作ったスペシャルランチを班内で検討。好きな食べ物ばかり選んでいないか、家庭科で学んだ知識から栄養バランスが偏っていないか、などを担任が発問し、子ども同士で日本語で話し合わせる

3 別の相手とペアになり、検討点を振り返りながら、もう一度「スペシャルランチ」を作る

point 4

- ●たくさんの友だちと話せるように、ペアになる相手を毎回変える
- ●制限時間は、ランチ1セット当たり1分。2回繰り返すことで、子どもが自分の反省を生かしたメニューを作ることが出来るため、一つ目のランチを作る時間は短めに設定する
- ●なぜその食べ物を選んだのか、どんな組み合わせが理想的なのか、子ども自身に考えさせる
- ●2回目のランチ・メニュー作りでは、単に言いやすい言葉や好きな食べ物でメニューを作るのではなく、食べ合わせや栄養のバランスなどを考えて作らせる

point 3

- ●素早く取ることばかりに意識が向かわないように、ALTの発音をよく聴いて、しっかり復唱するよう指示する
- ●単に「早くアイテムを取った方が勝ち」とならないように、特定の栄養素の食べ物を取った児童が勝ちとするような工夫をする。家庭科で学習した栄養素についての確認にもなり、教科横断的な内容で授業を進めることが出来る
- ●アイテムをもらう時、返す時には、無言ではなく、Item, please. / Here you are. / Thank you. といった会話をきちんと交わす。これがコミュニケーションの第一歩となる

つながる

学校と家庭の学び

子どもの生活習慣を改善する「にこにこ家族会議」

鳥取県米子市立五千石（ごせんごく）小学校

米子市立五千石小学校では、児童と保護者が相談して日々の生活目標を決め、1週間の生活を記録させる「にこにこ家族会議」という取り組みを中心に、児童の生活習慣・学習習慣の確立を図っている。

19項目の授業規律を教師全員で共有

米子市街地の南東、水田の広がる農業地帯に位置する米子市立五千石小学校。地域には3世代同居の家庭が多く、物静かな性格の子どもが大半を占めるという。しかし、2006年度に中村裕貴校長が赴任した当時は、落ち着いて授業を受けられない児童が、特に高学年で見られる状態だった。

「授業中に私語をする児童や、授業と休み時間のけじめがついていない児童が見られ、基本的な生活規律に不安がある印象を持ちました。まず、どのような規律に基づいて授業を行うべきかを、教師自身がはっきり認識することが必要だと考え、『学習のしつけ』（図1）という全学年共通の規律を、教師全員で話し合って定めました」

「学習のしつけ」に明文化したのは、「始業チャイムの前に着席する」「まっすぐに手を挙げる」など、19項目にわたる基本的な学習規範。教師はこれに沿って授業を行い、授業後は、規範をどの程度守らせることが出来たかを自己評価する。

また、「生活習慣は日常のあらゆる行動に影響する」という考えの下、子どもの生活習慣の改善にも取り組んだ。

「規則正しい生活をするためには、一定の就寝時刻や起床時刻を守り、三食きちんと食事を取ることなどによって、自己を管理する力が必要です。自己管理能力を高めることによって、自分の行動を律することも出来るようになり、おのずと学習態度も良くなるだろうと考えました」（中村校長）

子どもと保護者が話し合い生活改善の目標を決定

ただ、子ども一人では、規則正しい生活をすぐに送れるようにするのは難しい。学校の取り組みだけでは教師の目が届かない家庭での生活習慣は改善出来ない。そこで、同校は家庭と連携して、子どもの生活改善に取り組むことにした。

その中心となる取り組みが、各学期、長期休業前の1週間で行われる「にこにこ家族会議」（P.30図2）だ。家庭で子どもと保護者が話し合い、

「ねる時刻」「ねる時刻を守るためにがんばること」「おてつだいの内容」を決める。それに基づいて、全学年の児童が、「何時に寝たか」や「お手伝いをどの程度したか」など、毎日の生活を自分で記録する。1週間分の生活記録を記入した「にこにこ家族会議」の用紙は、子ども自身の振り返りと保護者のコメントを添えて、翌週の月曜日に担任に提出する。

「家庭で話し合って目標を決めることで、子どもに達成しようという意気込みが生まれ、家族の励ましや目標達成により自尊感情も高まります。また、学期末に生活習慣を整え、長期休業中の生活の乱れを防ぐねらいもあります」（中村校長）

多くの子どもは、寝る時刻は9時から9時30分に設定し、「だらだらテレビを見ないようにする」「宿題を早めに終わらせたい」「お風呂に早く入るようにする」などの約束事を挙げる。お手伝いでは、皿洗いや布団敷き、トイレ掃除などが多い。

子ども自身の振り返りでは、「普段より早寝早起きが出来て良かったです」「お手伝いをしてみて、お母さんに褒められてうれしかった」などの感想が見られるという。

一方、保護者のコメント欄では、「目標を達成出来て良かったね。お手伝いをしてくれてとても助かりました。これからも続けてください」といった励ましのコメントが大半で、子どもの達成感と自尊感情を高めている。多くの保護者が、子どもの寝る時刻が早まり、お手伝いの習慣も身に付いたと実感しているという。

「親子で一緒に目標や約束事を決めているからこそ得られる実感だと思います」（中村校長）

学習時間の目安を示し家庭学習を促す

五千石小学校では、家庭と連携して家庭学習習慣の定着にも取り組む。保護者向けに家庭学習のポイントをまとめた「家庭学習の手引き」（P.31図3）を配布し、家庭学習の重要性を訴えている。

「保護者の中には、『勉強は学校で教えてくれるもの』と思っている方

図1　学習のしつけ

「準備」「姿勢」「聞く」「話す」「移動」「研究」の六つの大項目の下に、「鉛筆を正しく持つ」「足の裏を床につける」など、19の小項目が置かれている。教師は右側の空欄に日付と評価（○、△、×など）を記入し、学級の実態に応じて、規範の加除も行う

「学習のしつけ」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロード出来ます。
http://view21.jp/s9441/

SCHOOL DATA

鳥取県米子市立五千石小学校

◎1981（昭和56）年創立。06年度から、子どもの生活習慣と学習習慣の確立に取り組む。家庭との連携が実を結び、成果を上げている。

校長　中村裕貴先生
児童数　164人
学級数　8学級（うち特別支援学級2）
所在地　〒683-0013　鳥取県米子市諏訪1695
TEL　0859-26-2292
URL　http://cmsweb1.torikyo.ed.jp/gosen-e/

米子市立五千石小学校校長
中村裕貴
Nakamura Yuki

図2　にこにこ家族会議

記載項目は全学年共通で、「お手伝いの内容」「寝る時刻と寝る時刻を守るためにがんばること」「お手伝いと寝る時刻の目標達成度合い」「子ども自身の振り返り」「保護者のコメント」といった項目が並ぶ。翌週の月曜日に担任に提出する

「にこにこ家族会議」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロード出来ます。
http://view21.jp/s9442/

もいます。しかし、授業で学んだことは、家で復習することによって、初めて身に付きます。家庭学習の重要性を保護者に知ってもらい、子どもに家庭での学習を促して欲しかったのです」（中村校長）

「家庭学習の手引き」は低学年用、中学年用、高学年用を作成している。声掛けの目安となるよう、各学年の望ましい「学習時間」「家庭学習の内容」「勉強する教科」などを具体的に記載している。声掛けについても、「字がきれいになってきたね」「毎日続けていれば、もっと速く計算できるようになるよ」など、具体例を示している。

教科として重視しているのは、国語と算数。両教科の家での学習の仕方を全学年の「家庭学習の手引き」に載せている。基礎学力として重要教科であることに加え、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果から、漢字や計算を間違える子どもが多いことが分かったからだ。

家庭学習の中心は、低・中学年までは宿題としているが、高学年では、宿題に加えて、授業の予習・復習もするように明記した。そのため、高学年では、「自学ノート」にも取り組ませている。宿題以外に、自分で課題を見付けて自由に取り組むもので、中には自学ノートが年に10冊以上になる子どももいるという。

「中学校に進むと、自主学習の役割が増します。高学年の保護者には、中学進学後を意識して、子どもに学習習慣を付けさせるように伝えています」（中村校長）

読書の習慣を付けさせることも、「家庭学習の手引き」のねらいの一つだという。どのような本を読むべきかを学年ごとに記載している。低学年用では、保護者に読み聞かせをするよう促している。中学年用では日本の物語だけでなく、世界の物語にも目を向けさせるよう説き、高学年用では偉人の伝記を薦めている。

「読書をすれば教養が身に付き、子どもの視野が広がります。学年ごとにふさわしい図書を挙げることで、子どもは楽しみながら読書が出来ます。また、子どもに学習習慣を付けさせるためには、『保護者も学んでいる』という姿勢が大切です。そのため、保護者の読書する姿を子どもに見せるように呼び掛けています」（中村校長）

行動を振り返らせ子ども自身にも成長を実感させる

子どもが、自分の学習習慣がどの程度改善されたかを振り返る機会としては、1学期と3学期の年2回、全校で「こころのアンケート」を実施している。

同校では、以前から自尊感情を測る目安としてこのアンケートを実施していたが、中村校長は学習習慣の定着度も測れるように質問項目を工夫した。現在は、「勤勉性」「学習達成の程度」「自分の成長を感じるか」

などの項目について、子どもが自己評価する。

「アンケート結果を見ると、大半の子どもが、自分が『成長している』と感じています。その実感は、自尊感情を育む上でも役立っているでしょう。続けていけば、今以上に成長することを望み、努力を惜しまない子どもたちになると思っています」（中村校長）

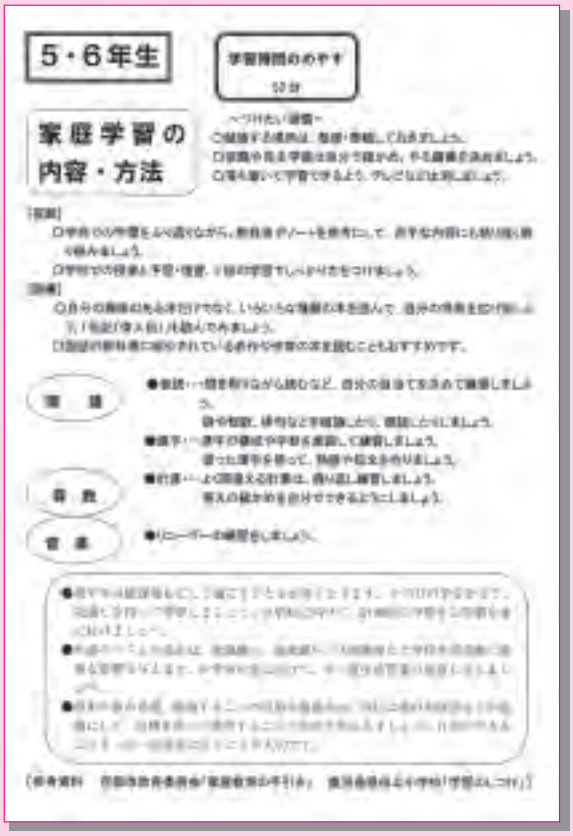
アンケートの直後には、「カウンセリング週間」を設けている。教師が一人ひとりの子どもとアンケート結果について面談する機会だ。多くの子どもは、「計算ドリルを毎日コツコツやっていくうちに、とても速く計算出来るようになった」「苦手だったリコーダーを家で繰り返し練習して、吹けるようになった時はうれしかった」など、努力する楽しさについて話すという。

1学期末の保護者面談では、子どものアンケート結果とカウンセリング週間での様子を伝える。その際、子どもが何を悩んでいるかも伝える。保護者が、把握していなかった子どもの側面に気付くこともあるという。

これらの取り組みの成果は、確実に数字に表れている。09年度の「全国学力・学習状況調査」の結果を基に、中村校長は次のように説明する。

「国語も算数も前年度より成績が上がりました。生活習慣についても、毎朝決まった時刻に起きる子どもや、家庭での学習習慣が身に付いている子どもが増えています。家庭も含めた生活習慣の改善に、これからも取り組んでいきたいと考えています」

図3　家庭学習の手引き（高学年用）



「学習時間のめやす」は60分。宿題については、「学校での学習をふり返りながら、教科書やノートを参考にして、苦手な内容にも粘り強く取り組みましょう」と記されている。取り組むべき教科としては、「国語」「算数」の他に「音楽」が挙げられ、「習った漢字を使って、熟語や単文を作りましょう」「よく間違える計算は、繰り返し練習しましょう」「リコーダーの練習をしましょう」など、それぞれの教科を家庭でどのように学習するかを記載している。また、中学校生活を意識することの重要性を述べ、予習・復習を呼び掛けている

ベネッセは、『学校&家庭　学び応援プロジェクト』を実施しています。

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」や「教育に関する情報冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供するプロジェクト「学校&家庭　学び応援プロジェクト」を実施しております。2009年度は「家庭で楽しく！　子どもの『ことばの力』が育つ本」「家庭で楽しく！　子どもの好奇心がぐん！　とふくらむ本」「働くってカッコイイ！　お仕事探険ワールド」などの冊子を発刊。2008年度実績では、のべ約6300校から約138万冊ものお申し込みをいただいております。「学び応援プロジェクト」は2010年度も実施予定です。貴校の教育活動にぜひご活用下さい。

学校&家庭　学び応援プロジェクト ホームページ
http://www.benesse.co.jp/manabiouen/

読者のページ

Reader's VIEW

テーマ：もし1年間、教師以外の職業に就くとしたら？

今回は、１年間だけ就いてみたい職業を理由と共に書いていただきました。教職を離れたとしても、人とかかわる職業を希望する声が多かったのが印象的でした。

◎社会科の教師としての見聞を広めるために、**ツアーコンダクター**として、人々をまとめつつ世界中を歩きたいと思います。［千葉県／Ｍ小学校／Ｋ・Ｍ］

◎**臨床心理士**。スクールカウンセラーの立場で学校を眺めてみたいからです。［大阪府／Ｓ小学校／Ｏ・Ｋ］

◎**テレビ番組の企画、運営、プロデューサー**。皆の力で大きなことを成し遂げる感動を味わいながら仕事が出来るからです。［岩手県／Ｎ小学校／Ｋ・Ｔ］

◎**児童文学の作家**です。これまで触れ合った子どもたちの感動する話を多くの人に伝えたいと思います。［鹿児島県／Ｎ小学校／Ｎ・Ｍ］

◎**教育誌の編集者**。地区、校種を超え、教育界を見渡し、コスト感覚を身に付けていきたいと思います。［東京都／Ｋ小学校／Ｕ・Ａ］

◎メディアリテラシーに大変、興味・関心があるので、**テレビ局や新聞社**に勤めてみたいです。［新潟県／Ｏ小学校／Ｍ・Ｙ］

◎社会科の事例に取り上げられているような自然豊かな地域で暮らし、**農業**をしながら１年間、その地の人々の暮らしや産業に触れてみたいです。［兵庫県／Ｎ小学校／Ｍ・Ｈ］

◎**病院関係**です。学校でも保護者、地域からの要望（時にはクレーム）があるが、病院はもっと切実だと思うので「経験値」を増やしたいです。［福井県／Ｕ小学校／Ｔ・Ｔ］

◎**冠婚葬祭に携わる仕事**はどうだろうかと考えます。人の大きな節目にかかわる仕事で、言葉遣いや態度、気配りが重視されます。この経験は学校現場、特に保護者対応に生かせると思います。［栃木県／Ｋ小学校／Ｓ・Ｙ］

◎**宿泊体験施設の職員**です。体験活動を中心に子どもたちとかかわりたいです。［山口県／Ｔ小学校／Ｉ・Ｓ］

◎何といっても話術を磨きたく、**講談師**として古里を語りたいです。［福井県／Ｔ小学校／Ｍ・Ｅ］

◎**俳優**になり、いろいろな人物に成り切って演じたいです。自分ではない他人にもなれるという面白さと奥深さを学べると思います。また、教師は子どもの前では「演じる」ということも必要なので、それも学びたいです。［群馬県／Ｉ小学校／Ｉ・Ｔ］

◎**小児科医**です。子どものことを真剣に考えている親の姿を見てみたいし、不安な親を自分の技術で助けてみたいと思います。［宮城県／Ｕ小学校／Ｓ・Ｙ］

◎**オーケストラのコントラバス奏者**。学生オーケストラで弾いていたので、プロのオーケストラで演奏できれば、こんなに幸せなことはありません。［鳥取県／Ｉ小学校／Ｎ・Ａ］

◎**映画プロデューサー**になり、教師の経験でのさまざまなエピソードを映画にしてみたいです（出来れば自分よりかっこいい役者を自分役にして）。［埼玉県／Ｋ小学校／Ｎ・Ｔ］

◎**政治家**になって、この国を変えてみたいと思います。［北海道／Ｈ小学校／Ｍ・Ｅ］

１年間、たくさんのご意見をお寄せいただき、ありがとうございました。

編集後記

今回の特集で取材をした二つの学校は、どちらも「言語活動が前提」ではなく、子どもが意欲的に今後の社会で必要な力を付けていくためには「言語活動」が必要なものであると考え、授業をつくられていました。私も、そして恐らく多くの先生方にとっても、小学生の時に受けた授業とは異なる授業。教師という仕事は、未来に求められる力を見極めて、それを授業の形にしていくことがとても大切なのだと改めて感じました。（青木）

VIEW21 小学版 2009 Vol.4　2010年2月18日発行／通巻第23号

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　柴崎朋実、二宮良太、山田真也
撮影協力　荒川 潤、川上一生
イラスト協力　幸剛

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2010